p3p if minato story

尾菜裸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｐ３ｐ　ｉｆ　ｍｉｎａｔｏ　ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ７２８０Ｐ

【作者名】
尾菜裸

【あらすじ】
これは一人の少年が生きていた可能性の話。

ep 01

覚えているのは一つの記憶。
自分には何もできず、ただくる衝撃によって飛ばされて、自分が大切だったものも一切守れなくて…死にかけた。それだけだった。

――――もうこんな無力な自分は嫌だ――――

だから俺は――あの時誓った……強くなるって。
でも…それは叶わなかった。

だから、答えがほしい。この自分が生きてる意味を…

日が出て間もない夜明けの時間。

長鳴神社のお賽銭前に一人の青髪の少年が無言でお賽銭と向かい合ってた。その表情は別に何かを願うわけでもなく、ボーっとしているようにしか目えなかった。

「前にあなたがそう教えてくださった話しでは、それはお金を入れることで願いが叶うのでは？」

不意に後ろから言葉をかけられる。少年はゆっくりと後ろを向きその言葉の主に顔を向ける。そこには銀髪でエレベータガールのような青い服を着た女性が立っていた。

「お金がない苦学生に何言ってるんですか…それに願い事をしてたってわけじゃ…なんとなく此処にいるだけですよ。というか、エリザベスさんは何故わざわざここに？また妙な依頼でもふっかけてくるんですか？俺、バイトで忙しいんですけど？」

そう言って少年は目の前にいる女性、エリザベスに数歩足を進める。

「ええ、このように。報酬は今までと一緒で直接渡す方法でよろしいですか？」

エリザベスは少年の言葉を無視気味にそう言いって、一枚の封筒を渡してきた。少年はそれを受け取るが何処か納得いかない顔をエリザベスに向ける。

「？…何か？」

「はぁ…いえ、別に。僕はいい加減その主とかいう人に会いたいと

思ってるんですが？」

湊は封筒を鞄に入れながら、不満そうにそう言う。

「すみません。湊様は正確にはお客様ではありませんので…」

「――…そうですか。まぁ、確かにこっちが無理を言ってやってるわけですし」

湊はそう言うと、エリザベスの横を通り、会談の方に足を進める。

「じゃあ、僕は学校なんで」

そういいながら少年・白井（しらい）　湊（みなと）は背中越しに手を振って去っていった。エリザベスはそれに対しお辞儀をし、見送った。

月光館学園の校門。

校門から続く道には桜が咲き誇っており、生徒達もそれぞれワイワイと楽しいそうな話し声が聞こえてくる。湊もバックを担ぎながらその中を歩いていた。

玄関に入ると、掲示板の周りには生徒の群れができていた。どうやらあそこにクラス分けが提示されているんだろうが…正直あの中を掻きわけていくのはめんどくさい。

どうしたもんかと溜息をついてた、そんな時

「おっすー！湊」

「！？…おはよう、順平」

湊はいきなり後からきた衝撃に頭を押さえ、後ろを見ずに人の名前を出す。どうやら誰かい頭を後ろから叩かれたらしい。

「およ？何で俺だってわかったのさ？」

「こんなことすんのは馬鹿しかいないから」

湊はそう言って振り返り、ギラリとした視線を向ける。そこには帽子をかぶり、少し髭をはやしてる少年・伊織（いおり）　順平（じゅんぺい）が立っていた。

「うげー。お前三年間クラス一緒の人間にそれはないんじゃないか～」

「親しい仲にも礼儀が――ちょっと待て。今なんて言った？」

湊は順平に文句を言おうとするが、順平の言葉に疑問を持ち聞き返す。

「おぅ？“三年間クラス一緒の人間にそれはないんじゃないか～”

…ってどうした？その何とも言えない顔は！」
「いや…別に」
湊はそう言って視線を横にそらす。
「あの～、別にっていう態度じゃないんですが～？そんなに俺と同じクラス嫌なのかよ？」
「いや、顔みしりが同じクラスなのはいいんだが…なんていうか順平の場合いろいろとめんどくさい事に巻き込む事が多いから」
湊はそう言うと、順平は心当たりがあるのか「いや～、あははは」と誤魔化すような笑い声を出す。
「で、でもよ。楽しかっただろ！なら結果オーライ！ＯＫＯＫ！」
「ま、否定はしないよ。っていうか、クラスわかってんならさっさと行こう。人が多い所は嫌いって知ってるだろう？」
「またお前は～。何でそんなに一人になりたがるかね。今どき流行らないよ～？」
「うるさい、黙――――」
湊が順平の頭を叩こうと手を上げる瞬間、周りから「おぉ！」と小さい歓声がおこった。
「…何？どったの？」
順平は周りで歓声を上げていた男子生徒に質問する。その生徒は「あれ見ろよ、あれ！」と言って指をさす。
その方向には二人の女子生徒がこちらに歩いてきていた。
「おお！美人二人で桜道！絵になるねぇ～、ゆかりっちと――誰？」

「――…知らないな。俺に聞くな、よ！」

湊はそう答えると、止まっていた手を動かし、順平の頭を軽く叩く。いてぇ！と順平は叫ぶが、湊はそれを無視して購買に向かう。

「おろ？何か買いもの？」

「朝飯。すぐ済むから待っててほしんだけど」

湊がそう言うと「ＯＫ～」と手をヒラヒラと振りながら答え、さっき女子生徒達がいた方向を向いた。そんな順平を見て苦笑いをして、自分も少しだけ女子生徒達…というか見たことない生徒の方を見て

（――転校生か？）

と心の中で呟きながら、購買に体を向けたのだった。

始業式が終わり、2年F組の教室で湊は朝買った3色コロネをもぐもぐと口に入れていた。そして全部食べ終わったのか、机に置いてあったイチゴ牛乳を手に取り、右後の方の席を横目に見る。

「――！」
「――――！」

そこには順平と先の女子生徒二人がワイワイと話している。その中で知らない生徒は赤い髪をポニーテールにした女子生徒だけだ。もう一人のピンクのカーディアンを着た岳羽　ゆかりで去年一緒のクラスで、学校じゃそれなりに有名だ。

その見たことのない赤髪の女性…HRの時間での自己紹介では有里（ざと）　葵（あおい）という名前らしい。湊は葵をしばらくじーっと見て、ハッと何かに気づき大きな溜息を吐く。

「これじゃまるでストーカーだ…あ、そういやエリザベスさんの封筒見てないな…こんなとこで開けられないけど」

そう呟いて、ゆっくりと立ち上がり、順平達の隣を通って教室を出ようとする。

「お、湊。もう帰るのかよ」

順平は湊に気づき、声を掛けてくる。湊は小さく溜息をつき

「バイトで忙しいんだよ。じゃあ、順平もほどほどに」
「んな！お前までなに――」

順平の言葉を最後まで聞かず、湊は教室を去っていった。

「…俺っちが普段からどんな目で知れてうれしいよ」

湊が教室を出ていったあと、順平は悲しい顔でそう呟いて顔を俯かせる。

「今ごろ気づかないでよ、そんなこと。じゃあ、私部活あるから行くけど、絶対手出さないでよ」

ゆかりは順平にそう言って、湊と同じ様に教室を出て行く。順平はその言葉にさらにズーンっと暗くなる。

「…みなと？」

そんな空気の中、今まで黙っていた葵が呟く。
「んあ？ああ、さっきの奴ね。名前は白井　湊。ちょっと暗い奴だけど、根は良いやつ……か？」
「ははは、私に聞かないでよ」
順平の疑問形に苦笑いでそう答える。
「いや、あいつも少し謎な部分多くてさ。でも悪いやつではないのは確かだよ…って、もしかして～」
「ないない。そんなんじゃないよ……ただ知り合いに名前が似てただけだよ」
葵は最初は笑顔だったが、最後の方は少し困った風な顔で言葉を出し、その場に妙に思い空気を感じた順平は慌てて声を出す。
「そ、そういやさ、有里は――」
「葵でいいよ」
「おう。えっと葵っちはゆかりっちと同じ寮だったり？」
「へ？うん、そうだけど？」
葵は何で今更といった顔で答える。
「ほー。じゃあ桐条先輩と同じ寮ってことじゃん」
「う、うん。でも、どうしてそんな事？」
「んあ？…俺っち寮生活に憧れてたりするからさ。聞いてみたかっただけ」
「へー、じゃあやってみなよ」
「いろいろと掛かるもんがあるからさ～。難しいんだよ」

順平と葵の話には先程の空気はなくなり、最初の明るい空気に戻っていた。

◇

商店街近くにある、とあるボロボロの一軒家の中。そこには湊がイスに座って、何かが書かれている用紙を読む姿があった。その前には机があって一着の黒い雨合羽が置いてあった。

「…タルタロスでの宝漁りばっかだな」

全部読みきったのか、そう言って手に持ってた物を机に投げる。

そして時計を見るとすでに腕時間の針は１１時３０分を指していた。

「そろそろ準備するか」

湊は立ち上がり、机にある黒い雨合羽に持ち上げて広げようとするが、湊は雨合羽を持った所で動くのを止める。

「…誰だ？」

湊がそう言うと、ドアの向こうで人が慌てて去っていくような足音が聞こえてくる。湊は溜息をつきドアを開ける。

そこには背を向けて走り去ろうとしてる順平の姿があった。

「…何かあったの？」

順平はまるでギギギと音を鳴らすように顔をこちらに向ける。その顔には小さいながらも少しの痣ができていた。

「いや、その、いろいろと」

「…まぁ、入れば」

順平はそれを聞くと小さく「おう」と呟き、ボロボロの家の中に入る。

「何処でもいいから座ってくれればいいよ」

そういうと湊は家の奥にある仮の台所に向けて歩いていく。順平は言われたとおり、よっこらせと声に出して座る。

「……ッツ！」

順平は顔にできている痣が痛むのか、痣の部分を押さえる。

「あの野郎…」

順平は憎々しげに、そう呟き右手で床に叩く。

その衝撃のせいか、床に束になって置いてあった用紙が崩れて散乱する。

「うお！？やべ！」

「…いいよ、そのままで。別に元から綺麗な部屋じゃなかったし」

順平は慌てて元に戻そうとするが、台所から帰ってきた湊にそう言われる。

「そ、そうか？わりいな…ってか、この紙何だ？いろんな数式書かれてるけどお前が書いたのかよ？」

「まさか。俺の――…叔母さんが書いたんだよ。俺はその問題を解いてるだけ。はい、お茶といらん世話」

湊はそう言うと、順平の目の前にコップと救急セットと書かれた箱を置く。

「さんきゅ」

「いいよ、別に」

２人はそうとだけ言葉を交わすと、そのまま無言になる。湊の方はゆっくりとお茶を飲み、順平は自分で痣の処置をし始めていた。

「っと、これで終わり…これどこおけばいい？」

順平はそう言って、救急箱を持って立ち上がる。

「いいよ、そこらへんにほっとけば」

「ほっとくって。俺が言うのもなんだけどよ、もうちょっと整理整頓しろよ」

順平はそう言って、この部屋の周りを見渡す。そこは用紙の束が所々に置かれていた。パッと見て綺麗とは言えない部屋だった。

「これは散らかしてるんじゃなくて、必要なものを出してるだけだ」

「必要なもんって…これ全部？」

「？そういったけど？」

順平はそれを聞くと「うげー」と声を出して、顔を下に向ける。

「…そろそろかな」

そんな話しをしていると、湊は小さくつぶやき、ゆっくりと立ち上がる。

「んあ？どっか行くのか？」

「いや、その…もうちょっとで時間だなっと思っただけ」

「？？どういうこと？」

順平はそう言うが、湊は順平の質問に答えずそのまま背を向ける。その瞬間、時間の針が１２時を指す。

――――瞬間世界が変わる。

部屋の電気は消え、外の光は月の光だけになってしまった。

「……」

湊はそれを当たり前のように、そのまま部屋を出ようとする…が

「お、おい！何だ、電気止まっちまったぞ、おい！」

「！！！」

あるはずのない言葉に慌てて振り返る。そこには慌てふためく順平の姿があった。

「まさか――」

「？ど、どうしたよ？そんな豆鉄砲食らったような顔は」

「適性者？…いや、様子からして初めてらしいし、そのままにしとくのもいいか」

湊はそう自己完結して、順平に何も言わずそのまま部屋を出て行く。

「お、おいちょっと待てって！」

順平は自分でも何で慌ててるのか知らずないまま、湊の後を追い

かけて家の外に出る。しかし、そこには湊の姿はなく、あるのは黒い棺が並んでいるだけだった。

「な、なんだよ、これ」

順平はそう呟いて、膝を地面に着いて呆然とすることしかできなかった。

◇

その日、真田　明彦という青年の腰には拳銃のホルスターがかけられており、夜の道を歩いていた。その周りには黒い棺が所々に立っていた。その不気味な光景の中、真田は何かを探している様子だった。

「…いた」

真田は遠くで黒い何かが蠢くのを見てそう呟く。そして拳銃を引き抜き、銃口を額に向ける。そして銃の引き金を引いた。
そして、黒い物体の近くに電撃が落ちる。外したのではない、わざと当てなかったのだ。

「■■――！」

黒い物体は真田を見て慌てて逃げ始める。それを見た真田は少し残念そうに溜息を吐いて黒い物体の後を追うが、それは何処かから飛んできた片手剣によって止められる。
その剣は黒い物体に的中し、黒い物体は悲鳴を上げながらゆっくりと消えていった。

「誰だ！」

真田は後ろに振り向き、その剣を投げた者を確認する。しかし、その方向には誰もおらず、一瞬で自分の隣を誰かが走りぬける感じがするだけだった。

「！？」

真田は再び振り向き、剣が突き刺さった方向を見る。そこには剣を拾い走り去ってく黒い人影があった。真田は急いでそれを追いかけようと自分も走るが、中々追いつけない…というか逆に引き離されている感じがした。

「糞！俺が追いつけないだと」

真田は一応体術と体力には自信があった。なのにこんな簡単に負けるとは思ってもいなかった。

「だ、だれかいるんすか？」
「！？今度は何だ！」
いきなり後ろから声をかけられたので、すぐに振り返る。
「うわ！？…あ、あの、俺、アイツを追いかけて？あれ？あいつって？誰だっけ？俺何でここにいんだっけ？」
真田が振り返った先にはニット帽を何処かで落としてしまった順平が立っており、何処か混乱してる様子で真田に話しかけてくる。
「お前…それにその制服」
「え？正副？なんすか？そ…れ。あ　れ？」
順平はそう言ってバタンと音を出して倒れてしまう。
真田は倒れた順平を見て溜息をし、ポケットから通信機らしきものを取り出す。
「もしもし、ああ…いや、適性者っぽいのを見つけた。そのままにしとくわけにはいかないだろ？何処に運べばいい？」

◇

ビルの影。黒い雨合羽を着た湊は遠くから真田の様子を見て、安心したような溜息をつく。

「これでイレギュラーみたいなものに襲われる心配もないし、今後の事も何とかしてくれんだろ…でも、あの人足速いな。ちょっと真面目に走っちゃったよ」

湊はそう言うと、「よっと」と呟きながらビルの壁を背に座り込む。

「今日はもう無理かな。明日行くとしようか」

湊はそう言って、空を見上げた。

そこには月を背にして佇む、青い塔が見えた。

ep　01（後書き）

やってしまった。自分が好きなp3 pの小説を…いろいろと酷くてすみなせん。

矛盾がいろいろあると思いますが、目を瞑って優しく指摘してくれれば幸いです。

順平の初めての影時間を少し早めに（？）しました。

ep 02

四月八日の早朝

順平は病室のベットの上で眠っていた。順平はゆっくりと上半身を上げて周りを見渡す。

「あれ？俺確か…あれ？つーか何で病室なんかに？」

順平は昨日の記憶と、何でここにいるのかがわからず、考えこむ。その時、不意にトントンとノックされる音が聞こえてくる。

「おい、起きてるか？」

「うぇ？は、はい！？」

順平は驚きながら声を出す。
そして、そのドアは開かれ、そこから真田とロングの赤髪の女性が入ってくる。
「うぇ！？桐条先輩！？それとボクシング部の真田先輩！？な、何でおれなんかの部屋に」
「ん？何だお前俺のこと知ってるのか？」
真田は順平が自分を知っているのに意外そうな声を出す。
「い、いや、だってあんだけ女子生徒連れて歩けば…じゃなくて！何で有名な先輩方がここにいるんすか！？」
順平はさらに混乱したのか、頭を押さえて顔を横に振りだす。
「明彦。まずは彼に現状の説明を先にした方がよさそうだ」
そこに後ろに佇んでいた女性、桐条　美鶴が話を進めるために真田にそういう。真田も「そうだな」と頷き、ベットで未だ混乱している順平に声をかける。
「伊織　順平と言ったな。この病院にいるのは昨日の影時間の時に俺が保護して運んだからだ」
「へ？影時間…？ってなんすか？新しい隠語？」
順平はいきなり聞いたことのない言葉に顔を傾ける。
「簡単に言うと毎晩深夜０時から訪れる“普通じゃない時間帯”だ。普通の人間は黒い棺になってしまうが、時々現れるんだ君のような

“適性者”が」

その質問には後ろに佇んでいた美鶴が答えた。しかし

「よ、よくわからないんすけど？」

順平は申し訳なさそうに頭を掻きながら謝る。

「いや、それが当然の反応だ。ただ、私達は一人でも仲間がほしいんだ」

美鶴がそういうと、順平は不思議そうな顔をする。

「何で仲間なんか必要なんすか？さっきの話ならただ不思議時間があるって感じなんじゃ？」

「何だ、さっきの話大体はわかってるじゃないか。そうだ、それだけじゃないんだ。その時間には“シャドウ”っていう名の怪物、人類の敵がいるんだ。俺達はそれを倒すことを目的としてる。どうだ？わくわくするだろ？」

真田は楽しそうにそう順平に同意をもとめてくるが、後ろにいた美鶴に「お前はなんでそんな遊び感覚で！」とお説教を食らう。

「…怪物？人類の敵」

順平はそう呟いて、ニヤリと口を吊り上げる。そしてこれはチャンスだと思った。自分を変えるチャンスだと。

「先輩！」

「ん？どうした？」

順平は大きな声を出して二人の方に顔を向ける。
「俺やるっす！やらしてください！」
「そ、そうか。だが、もう少し説明してから決めた方がいいと思うが？」
美鶴は少し心配そうにそう言うが、順平は顔を横に振り口を開く。
「正直難しいこと聞いてもわかんないっす。それに俺が怪物を倒すことで人を助けれる！それでやる理由充分じゃないっすか！」
そう言って、ガバッとベットの上に立ち上がり、ガッツポーズをとる。
「…そうか、ありがとう。では召喚器は用意しておこう。それとわかってると思うが、この事は他言無用でお願いする」
「うっす！」
「よし！これで“あそこ”に入れるな」
二人が話終わった後で真田はそう言って、立ち上がる。
「明彦…言っておくが、それは彼女達と彼が召喚できるようになってからだ」
「わかってるさ。でもそんなのすぐだろ？」
明彦はそう言ってウキウキとした様子でシャドウボクシングを始める。
「はぁ…その遊び感覚をやめてもらいたいんだが。それと伊織。君

は今日は学校を休んでおけ。教師には私から話しておこう」
「まじっすか！あざーっす！」
順平はベットの上で頭を下げて先輩達にあたまを下げた。
「だが、安静にはしとけよ」
美鶴はそう言って目を細くして順平を見る。順平はビックとその視線にビビり、すぐにベットに座って、コクコクと頷いた。
それを見た美鶴は「よし」と言って病室から出て行く。その後に続いて真田が片手を上げて「じゃあな」と呟き、出て行った。
「っ～～～～～うっし！」
順平はそこまで嬉しいのか、小さくガッツポーズをしてそう呟いた。

順平がいる病院の玄関。そこから美鶴と真田が2人でゆっくりと出てきた。

「…それで、君が見た黒い人影は人間だったのか？」

美鶴は普通に歩きながら、隣を見ずに言葉を出す。

「わからん。俺は人間だと思ったが、よく考えると人間なら何故逃げた？という疑問が出来る」

真田はそう言って難しい顔で悩む。しかし、それに対し美鶴は大体の見当はついてるのか、振り返り順平がいるであろう病室を見る。

「それは彼を見つけてほしかったんじゃないか？」

「伊織順平を？…なるほど。確かにその説もありえるが…じゃあ何で素直に話してくれなかった？」

「さぁ？だが、明彦に攻撃しないあたりを見ると敵ではないだろう。だが、直接話を聞かなければ断定は無理だがな」

そう言って、美鶴は前に向きなおり、学校に行くため足を進める。真田も「そうかもな」と言って美鶴の後に続いた。

◇

月光館学園の校門。そこには昨日と変わらない格好の湊が眠そうに登校する姿があった。

「おはよう！」

その時後ろから声を掛けられ、湊はこんなまともな挨拶誰だろと思いながら後ろを振り向く。

「…おはよう」

湊が後を向いて見えたのは噂の転校生、有里　葵だった。一応挨拶されたので、挨拶は返す。

「あ、私の事わかる？」

「噂の転校生　有里　葵さん、でしょ？何か用？」

湊はそういうと振り返り、足を進める。葵はそれを見て湊の隣につき一緒に歩きながら話しを続ける。

「何だ知ってたんだ。私が自己紹介してた時、眠そうな顔してたから覚えてないかと思ったよ」

「悪いね。僕はいつも眠そうな顔してるんで…っていうかよく見てるね。普通初めての学校でクラスの目の前で自己紹介って普通緊張するんもんじゃないの？」

「あはは、確かに。でも逆に考えてみてよ。緊張して自己紹介してるのに、目の前で眠そうな顔されたら記憶にのこるじゃん」

葵がそう言うと、湊は「そんなものかな？」と呟き、げた箱に靴を入れる。

「でも、俺から言っといてなんだけど…君、緊張とか無縁のタイプじゃないの？」

「あ、ばれた？」

葵はそう言って、あはははと笑いながら湊と同じ様に靴をしまう。

「じゃあ、俺は購買だからここで」

「ん？そんくらいならついてくよ？」

葵は湊の言葉に笑顔で答える。が、湊はそれに対し苦笑いであった。理由は簡単で、周りの視線が問題だった。彼女は湊が言ったとおり“噂の転校生”なのだ。それが男と一緒に話す…順平なら問題ないんだが、湊の場合「彼はあまりしゃべらないのに？まさか！？」などと見当違いな見解をする人間がいるということだ。

しかし、彼女は狙ってるのか、天然さんなのか…そんなの関係ないといった笑顔を向けてくる。

「…まぁ、いいけど」

湊は心の中でどうでもいいという結論を出し、そのまま購買に足を進める。

「ねぇねぇ、湊君ってバイトしてるんでしょ？どんなバイト？」

「秘密。あえて言うなら実りがいいバイト。おばちゃん、いつもの」

葵の言葉を簡単に答えながら、購買のおばちゃんに五百円玉を渡す。購買のおばちゃんは「あいよ」と言って三食コロネ４つとイチゴ牛乳を湊に渡した。

「…いつもそれ買ってるの？」

「？うん。これが安いし、好きだからね」

「ふーん、甘い物好きでしょ？」

「いや、別に食べ物に好きと嫌いとかないし」

湊はあんまり興味がないのか、そっけなさそうに答えるが、それに対し葵は「私も～」と何故か嬉しそうに答えていた。

（まったく…何がなんだか）

湊はそう思いながら頭を掻き、そのまま2年F組に向けて歩きだした。教室に着くまで葵の質問は止むこともなく、視線も消えることもなかった。

そんな朝を迎えた湊は、一通りの授業を終え素直に帰ろうとしたところ

「ねぇねぇ、湊君」

「…」

また葵に捕まってしまっていた。

「？どうしたの？その何とも言えない顔は」

「何とも言えない状態だからそんな顔してるんだけど？」

葵の言葉にムッときたのか、それとも少しの反攻なのか今までより少しきつい言葉を出す。

「…もしかしてウザかったり？」

「別に。ただ、何で俺なんかに？って気持ちがあるだけ」

「あ～…確かに、いきなり面識のない転校生が話かけてきたら焦るかもね。でも、君って順平と仲いいんでしょ？」

湊はそれに「否定はしないけど」とだけ答えて、バックを担ぐ。

「だからさ、順平みたいな性格がいいのかなーって思って、なら偽・順平になって友達になろうかなっと…」

「……君、よく意外と天然さん？って言われない？」

「ははは、言われる～…ってどういうことよ！？あれ、いない？」

葵は湊に突っ込みを入れようとするが、すでに彼は席におらず、教室の出口まで歩いて行っていた。

「ちょ、待ってよ！」

葵はその後を慌てて付いていった。

そして、学校の下校道。湊の後には相変わらず葵の姿があった。

「ねぇねぇ、君の家って何処なの？」

「カレーの大国」

「わー、おいしそう、ってコラー。真面目に答えろー」

葵は湊の答えに、棒読み気味に言葉を出す。それを聞いて、湊は大きなため息をつき

「俺の質問には答えてないくせにそれを言うのか？」

「へ？君の質問？…ああ、何で君に構うかって話？」

葵の言葉に湊は頷き、その疑問の答えを求める。

「う～ん。別に下心とかはないんだけどさ」

何か照れることがあるのか、少し頬を赤くして苦笑いを湊に向ける。

「私、昔お兄ちゃんみたいな人いてさ。確か同い年だったし、成長したら湊君みたいになってただろうな～って思ってさ」

「…何か日本語おかしくないか？」

「あははは、だよね。言ってる自分が恥ずかしいよ」

葵はそう言ってよよよと涙を流す。

「…で、僕が君のお兄さんに似てるから何なの？」

「いやー、友達としてしゃべってみたら楽しいかな～って、実際結構楽しかったし。あははは」

そう言って、頭に手を置き本当に楽しそうに笑う葵を見て湊は小さく溜息をつく。

「な、何かな～？その溜息は～？喧嘩売ってるのかな～？」

そう言いながら、額に青筋を立て始めている。そして握りこぶしを作って、笑顔を向けてきている。湊は仕方ないと思って、真面目な答えを口にする。

「いや、楽しそうでいいなっと思って…で、有里は順平みたいな友達になってほしいの？」

「へ？うん。まぁ、そんな感じ」

「…順平とは三年間クラス一緒だったから、あれ見たいな感じになれないと思うけど…まぁ、僕も今日の会話はそれなりに楽しかったから別にいいんだけど」

「けど？」

湊は葵の顔を真剣にジッと見て、口を開く。

「友達って、そんな言葉だけの約束でできるもんじゃないと思うよ」

「！！…そ、そうだね。ごめん」

湊の言葉にシュンと落ち込み、俯く。

「だから、友達になれるように僕も協力するよ」

「！ほんと！？」

湊の言葉にすぐに顔を上げて喜ぶ葵。それを見た湊は（…犬みたいだ）とそう思った。

「で、有里の家は？もう結構な時間じゃないの？」

湊はそう言って、腕時計を見て時間を確認する。実際はそこまで

気にする時間でもないんだが、転校初日では親が心配する時間帯だ。
「あ、私は――っていうか名前で呼んでよ」
「…葵の家は？でいいのか？」
「ＯＫ！で、私は寮なの。っていうかさっきの質問！私は答えたんだから答えなさい！」

葵は思い出したかのように、そう言って湊に指をさす。

「は？ああ、家ね。ここから北の方向にあるのは確かだよ」
「わー、イッツ　アバウト。真面目に答える気なしだよ」
「言葉で説明すんのメンドクサイ。今度時間のある時に順平に教えてもらえば？」
「え　ぇ！？順平には教えたの？湊ってまさか――」
「葵は俺をどんな存在にしたいのかな？」

湊は葵が言い終える前に葵の頭に拳を置く。それは暗にそれ以上言ったら力込めるぞという意思だった。

「え、えっと…何で順平はしってるのかなー？」
「今の君みたいに無理やりに…って何馬鹿やってるんだ俺達は。はぁ…俺は帰る。じゃあね」
「あ、うん。私も帰ろっかな」
「…送ってこうか？」

湊は一応女性を一人で帰すのはどうかと思い、そう提案する。

「ううん、結構近い所だし。勝手についてきてそこまで世話に――って何その意外そうな顔は～？」
「いや、意外というより驚――いや、何でもない。じゃあまた明日」

湊は葵が再び拳を上げるのを見て、すぐにそそくさと逃げていった。

それから湊がいつものボロボロの家に入る頃には、もうすでに空

が暗くなっていた。

「…らしくないことやってしまった」

そう呟きながらも、何処か嬉しそうな湊はドアのカギを空けて、家の中に入る。

「御帰りなさいませ」

いきなりの言葉に、湊はずてーんと漫画のように転ぶ。

「…エリザベスさん。勝手に家の中とかプライベートに乗り込まないで」

「？ですが、前は家の中に入っても“気にすることはない”と言ってくださいましたが」

「同意があるのと勝手は大分違うんですよ、エリザベスさん」

そう言いながら、ゆっくりと立ち上がりエリザベスに顔を向ける。

「前の依頼ならまだですよ。期日もまだじゃなかったですか？」

「いえ、湊様が主のお客様と接触したようなので、一応報告したほうがいいのかと」

エリザベスの言葉を聞いた湊は驚いたのか、目を見開く。

「そうですか。あれが…俺に答えを出してくれる存在ですか」

「そう、主はおっしゃっておりました」

「…そう、か。じゃあ依頼もさっさと済まそうかな」

湊はそう言って、床に置いてあった黒い雨合羽を手に取る。

「いってらっしゃいませ」
「…いや、エリザベスさんも出るの。つーか出なさい。そして元の場所に帰りなさい」
湊はエリザベスの手を持って、急いで自分の家を出ていった。

◇

時間は進み、影時間…真田　明彦は何時もの見回りで、軽くランニングをしながらイレギュラーを探していた。とは言ったのものの、イレギュラーなんてものはそうそうに出ないので、単なる散歩みたいなものになっていた。

「…つまらんな」

真田は足を止めて、そう呟く。そして今度はシャドウボクシングを始める。

（これは、昨日の黒い人影に会うのも無理か？）

真田は誰もいないパンチを繰り出しながら、そう考える。
敵ではないが、味方でもないと自分は思っている。ならば、昨日の屈辱を早めに晴らしたい。と思っているが、そんなに世界は狭くないだろうと真田は半分諦めかけていたその時

真田の目に黒い人影歩いてる姿が写った。

「！！…いた！」

真田はそれを見て何処か楽しそうに笑い、その影を静かに追いかけた。

どうやらあちらはこちらに気づいてないようで、目の前の建物を見上げていた。

「…あれは、タルタロスを見てるのか？」

真田はそう言いながら、影の人物が目視できる距離まで慎重に近づく。

「誰？」

しかし、それはすぐに気付かれてしまった。だが、ここからでも人影の姿は目視できる。

「…黒いトレーニングウエア？いや、雨合羽か？」

真田は一目見た感想を口に出して言う。雨合羽の人間は真田の方に振りかえらず、そのままタルタロスに足を進める。

「ちょっと待て！俺はお前に話があるんだが？」

「…俺にはない」

こもった声をだしながらも、雨合羽の人間は足を止めたまま真田の言葉を待っていた。

真田は最初は何故止まってるのかわからなかったが、こっちの質問を待ってることに気づき、口を開く。

「お前はこの時間が何なのか、それを理解してるか？」
「…名称は影時間。シャドウという化け物が自由に活動可能になる危険な時間帯…と言えば満足ですか？」

雨合羽の人間は未だに真田の方に振り向かないが、後姿でも何処か呆れているのはなんとなくわかった。しかし、ここで怒っては話にはならないと真田は自分を落ち着かせ、再び口を開く。

「ああ、満足だ。それで、お前は何でその事を知っている」
「…さぁ？何でですかね？」
「ふざけるな！真面目に答えろ！」

真田はそう言いながら、雨合羽の人間に近寄ろうとするが、それは一閃の剣撃によって防がれる。真田は一歩下がりその斬撃を避けて、すぐに前を向く。
雨合羽の人間は何処に隠し持っていたのか、片手剣を片手に出して切り刻むことで、ようやく真田の方を向いていた。
その顔は黒いマスクが付けられていて、目の部分しか見れなかった。

「…もういいでしょう？俺はさっさとタルタロスの中に入りたいんですが？」
「お前、タルタロスの事まで！というより、お前はあの中にナビもなしに入る気か！？無謀すぎる！」

真田は雨合羽の人間に警告の言葉を叫ぶが、雨合羽の男はそれに対し顔を横に振って
「生憎、僕はそこまで弱くないんで。それに迷わないように手は打

ってますし」

そう言って、片手剣を雨合羽の中にしまいタルタロスの方に向き直る。

「…それは暗に俺が弱いと言ってるのか？」

しかし、真田はそれを許さずに…というか、先程の言葉に腹が立ったのか拳に力を入れている。

「別に。ただ、俺により強いってことは――」

そこまで言うと、雨合羽の顔にパンチが飛んでくる。

雨合羽はそれを先程の真田のように一歩だけ下がって避ける。

「なんですか、いきなり」

「俺は立場上ここに入る人間を止めなければいけない。それにお前の話を美鶴に話さなければならない。だが、お前はその気がない。ならこれしかないだろ？」

そう言いながら、真田は片手に召喚器を握る。それを見た雨合羽は再び懐から片手剣を取り出す。

「…要は戦いたいと？」

「ふっ、どうとっても構わん」

そう言って、真田は引き金を引く。そして真田の頭上にペルソナ？ポリデュークスが出てくる。

「ジオ！」

そう叫ぶと、雨合羽の方に電撃が走る。雨合羽はその電撃に対し手に持ってる片手剣を電撃に向けて投げる。

「な！？」

真田はその行動に一瞬驚くが、雨合羽がそれと同時に横に走り出したのを見て、気を引き締め両手を構えなおす。が

雨合羽は真田に向かわず、そのまま何処かに向けて逃げて行っていた。

「お、おい！！」

「めんどくさいので…さようなら」

そう叫びながら、雨合羽は影時間の町に消えてった。

真田はもちろん追いかけたが、昨日の追いかけっこが嘘のように、距離を離されていく。

「くそっ！」

真田は立ち止まり膝に手を置き、片手を近くにあった壁を叩き、悔しそうに叫ぶ。

「…今日はもう帰るか」

真田は汗を拭き、召喚器をしまってため息まじりに声を出した。

◇

「…だから…はぁ、はぁ…結構速い…はぁ、はぁ」

真田から大分離れた場所に黒い雨合羽の人間、湊は壁に手をつき息を整えていた。

「おい。何してんだ？お前」

その時不意に前から声を掛けられ、湊は顔を上げる。
そこには暑そうな赤いコートとニットキャップをきた少年が変な物を見るような視線を送っていた。

「ああ、あなたか」

湊はその人物を見て安心したのか、壁を背にして座り込む。

「何だ？何かあったのか？」
「いや、白髪の紅ノースリーブベストを着た人間に見つかってしって…質問するのもめんどくさいんで、逃げてきたんですよ」
「……そうか」

コートの男はそれだけ言って、そのまま佇む。
湊はそれを見て、「ああ」と何か思い出したかのように声を上げる。

「“あれ”ですか？ある事はありますけど、一度に家に帰ればありますけど…荒垣さん。何度も言いますがあれは――」
「うるせ。お前に関係ないだろ」

コートの男、荒垣　真次郎　は機嫌が悪そうにきっぱりとそう言う。

「はぁ、確かにそうなんですけど…それで？今すぐじゃないといけないんですか？」

湊はそう言って、ゆっくりと立ち上がる。

「できれば、頼む」

「はいはい。じゃあ今日も諦めて帰りますか。はぁ」

湊はため息をつき、荒垣の横を通り過ぎる。荒垣はそれを無言でついていった。

そして湊達は家の前につき、湊は玄関のドアに手をかけようとし、後を振り向く。

「答えはわかってるんですが、一応聞きますね。入ります？」

「わかってんなら聞くな」

「はいはい、入らないと…相変わらずですね。あなたも」

湊はそう言いながら、家に入り自分がいつも使ってる部屋に入る。

「何処置いたっけ？…あ、あった」

湊は部屋に置いてあるケースを開けて中身を確認する。そしてそのケースをそのまま持ち上げて、再び外に出る。荒垣はさっきと変わらない格好で待っていた。

「はい、どうぞ。一応少しは改良しましたけど、元が元ですから…あんま意味ないですし」

「気にすんな…覚悟して使ってんだ。それで報酬は――」

「前と一緒でいいですよ。適当に」

湊はそう言って、手をひらひらと振る。

「ああ、わかった。わりぃな」

荒垣はそう言うと、後を振り向き去っていった。

「…あれはあれでいいのかね？なぁ、白婆（しろばば）」

湊はその姿を見ながら、ポツリとそう呟いた。

ep 03

時間は夜中、日本のある地域…人工島を結ぶ大きな橋の上を白衣の白髪の女が一人歩いていた。パッとみ若く見える美人であり、手には花束が握られていた。

彼女は適当な場所に止まり、手に持っている花を下にそっと置いた。そして少し目を閉じて黙とうをした時…

「…ここで何かあった？」

そう不意に声をかけられた。普通黙とうしてる人間にこんな無神経なことを言うだろうか？…だが、彼女はそんな無神経な言葉にもフッと笑い、

「――――数年前に少しね」

そう答えて、声の方向に目をやった。そこには青髪の少年が生気のない目でこちらを見ている。

「しかし、あんたもうあそこの人間じゃないんだ。少しは常識というものを教えてやろねばな」

女性はそう言って少年の頭を撫でる。

「……うるさい、ババァ」

そう言う少年の目には、先ほどより生気が戻ったように見えた。

――――パァン！！

「！！」

教鞭が黒板を打つ音で湊は我に返った。

今いるのは大橋の上じゃなく、教室の中。そして授業中で、教師は黒板に書かれていることを教鞭を使って説明している。

周りの生徒は必死にその内容をノートに写し取っている。

「…」

湊もそれを真似るように窓の外を見るのをやめ、机に視線を向ける。その机の上にはノートと一枚の紙が置かれている。その紙は一昨日エリザベスからもらった依頼内容が書かれている紙だ。

その紙にはレアものの飲食物から物騒な物の名称の一覧が書かれている。そして最後には四月十二日と期日が書かれており、要はあと三日で書かれているもの全部を集めなければいけないのだが…今、手に入れたものがまったくない。

（…ピンチだ）

湊は片手で頭を押さえる。

湊にとってタルタロスの探索はオペレータがいないので簡単ではないが、彼のペルソナの特性のおかげで何とかなる。

しかしそれには相応のリスクが出てくるので、やはり簡単ではない。

この数日で終わらせるのは難しいだろう。

「…ピンチだ」

授業中にも関わらず、そう呟く湊であった。

その後すぐに鐘がなり、授業が終わり先生は教室から出て行く。
湊は何時も通り荷物を鞄にしまい、すぐに帰ろうと席から立ち上がる。
「よぅ、湊。お前もう帰るのか？」
だが、順平の妙に浮いた声によってそれは止められる。
「？」
その順平の様子を見た湊は不思議そうに見つめる。
「そ、そんな俺が挨拶すんの珍しいかよ」
「…いや、何か何時もよりテンション高いなと思って…無駄に」
「ちょ、無駄とか言うなよ！…ってかわかる？わかっちゃう？」
その態度を見て、湊は少し嫌そうな顔をし一歩後ろに下がる。
「何かあったの？」
「いや～、言いたいのは山々なんだが、言うわけにはいかないんだ～。じゃ、俺はいろいろ準備があるから。じゃあな～」
言いたい事でけ言った順平は機嫌が良さそうな足取りで教室から出てく。
その光景を見ていた湊は
（ペルソナに目覚めたのが嬉しいのか？…よくわからん奴だ）

そう心の中で呟き、鞄を担ぎ直し順平の後を追うように教室を出て行った。

ep 03

時間は夜になり、影時間になり数十分。
湊は予定通り、雨合羽姿でタルタロスの中を散策していた。その肩には大荷物のリュックが担がれていた。

「これで大体そろったか…急ぐほどでもなかったな」

湊は手に持った紙を見ながら荷物を確認する。そのすぐ隣には黒い液体のような生き物がゆっくりと通り過ぎる。
その生物（？）の正式名称は“シャドウ”と言われる人間の精神を喰らう怪物と言われているんだが…そのシャドウは彼を襲う動作もしない。
これが、彼が案内もなしにタルタロスを落ち着いて歩ける理由なのだ。

「そろそろ帰るか」

そう言って近くにある装置に足を向ける。その時、不意に彼の体に嫌な寒気を感じる。
湊はバッと後ろを向くが、そこにはゆっくりと動くシャドウ以外誰もいない。湊は（気のせいか）と自己完結し、一階のエントランスホールに移動した。

「…やっぱり何かいる？」

湊はエントランスに降りても感じる嫌な寒気を感じ取り、階段にある入口を向く。
しかし、何かいるのなら早く帰った方が面倒事に巻き込まれない。ここはさっさと帰ろうと思い、タルタロスから出て行く。

――――そこには待っていたかのように真田が立っていた。

それを見た湊は見るからに嫌な顔をしながらも、腰にかけてあったサーベルを抜く。

「あんたもしつこいな。そんなに俺の事情が知りたいのか？」
「当たり前だ。こっちは遊びでやってるんじゃないんだ…本当に一人でタルタロスを探索するとはな…お前本当に何者だ？」

真田は「遊びじゃない」と言いながらも、その顔は少し楽しそうだった。

（…くだらない）

湊はそう思いながらも、戦いは避けられないと踏んだのかサーベルを構え、腰を低くし何時でも動けるような姿勢をとる。

「…ふっ」

真田も湊が戦闘態勢に入るのを確認すると、少し小さく笑いファインティングポーズをとる。

「「――――」」

2人の間に無言の時間が過ぎる。そして、2人とも足を前に出そうとしたその瞬間――

「■■■■■■」

「「っ！！」」

第三者の介入が入る。

その姿は黒い腕が集まった“化け物”。その何個もある手には剣が握られている。十中八九“シャドウ”だろうが、その大きさは湊も今まで見たことがないものだった。

「――――」

そのシャドウは湊を少しの間見つめるが、視線を逸らし真田の方を見るそして

「■■■■■■」

真田に剣を向けて襲ってきた。それに対し、戦闘態勢に入っていた真田の行動は早かった。すぐに後ろに飛び、襲いかかってくる剣撃を避け、すぐに掛けてあったホルスターから“召喚器”を額につけて、トリガーを引いた。

「ジオ！」

そう叫ぶと同時にポリデュークスが現れ、その腕から電撃が放た

れる。
しかし、電撃を受けてもシャドウは怯むことなく襲いかかってくる。
「ちっ」
真田は突きだされてくる剣を無駄のない動きでぎりぎりで避ける。が、その突き出された腕は真田の体を叩くように振り払われた。
「がっ」
真田はその攻撃を避ける間もなく、それを喰らってしまい、体は宙を飛んだ。
「…ちっ」
それを見ていた湊は舌打ちをしながらも、彼に止めを刺そうとしているシャドウにサーベルの攻撃を入れる。
「■■■」
シャドウは驚いたのか、その攻撃をまともに喰らい体勢を崩した。
「…立てるか？」
シャドウ越しにいるであろう真田に声をかける。そうしながらも、相手のシャドウの様子を窺う。どうやら湊を敵と認識したらしく、湊に向けて剣を向けている。
「ああ…何とか」

「じゃあ逃げろ。俺も逃げる」
「戦わないのか！？」

真田がシャドウの向こう側からツッコミを入れてくるが、一人で戦える相手ではない。

「面倒事は御免だ。そっちで片づけろ」

そう言いながらシャドウの剣を捌きながら、シャドウの後に回り込む。しかし、無理な動きをしたせいか、最後には体勢を崩し膝を地面についてしまう。
そこには同じ様な体勢をとっている真田が驚いた顔で湊を見ていた。

「さっさと逃げろっていたっと思うが？」
「う、うるさい。少し背骨が痛いだけだ」
「ふん、折ったか…」

そう言って手に持ったサーベルを逆手に持ち槍を投げるように構える。
そして、勢いよくシャドウに向けて放り投げる。そしてすぐに振り返り真田い肩をかす。

「な！？」
「■■■■」

真田が驚くと同時に、湊が投げられたサーベルがシャドウの仮面部分に当たる。シャドウはそれが弱点なのか、叫び声のようなものを上げて倒れる。

「…今のうちだ。急ぐぞ」
「な！？今がチャン――――いや、なんでもない。それと自分で走れる！」

真田は彼でもどうにでも出来ないということがわかったのか、湊の手を振り払い自分で走り始める。

「わかった…ならさっさと行くぞ」
「…お前ついてくるつもりか？」

真田は横腹を押さえながら走ってる状態で不思議そうに聞いてくる。彼が真田に何かする意味もないのだ。真田にこれ以上ついて行く必要もないだろう。

「…ここで別々に逃げて、もし俺の方にやってきたらメンドクサイ」

湊は顔を前に向けながら、そう答える。真田は「なるほど」と納得し走るのに集中する。

「■■■■■■■」

後からはもう立ちなおしたのか、あのシャドウの雄たけびの様な叫びが聞こえる。

真田と湊はチラリと後ろを見る。そこには小さいシャドウの群れと巨大なシャドウがこちらに向けて進軍している光景だった。

「…さっさと逃げるぞ」
「ああ」

2人はそう言って、走る足を早めたのであった。

少し走って、もう少しで真田が目指しているところに着こうとするが、真田は「あ」と何か思いついたかのように呟く。

「？どうした？」

「いや、通信を入れるのを忘れていた」

真田はそう言って、通信機のような物を取り出し連絡をし始める。湊はそれを見て、興味がないのかすぐに前を向きなおす。

（…このまま行くと、この男の本拠地みたいなところにいく。それは避けたいが）

湊はそう思いながら、再び後ろをチラリと見る。そこには相変わらずの進軍風景…これを相手するのは難しい。

（だからと言って、こいつの仲間に捕まるのも御免だ）

そう思いながらも、いい案がない。そして、そんな事をやってる間に目的地についたらしい。
その目的地は何処か古ぼけてはいるが、何処か趣きがある建物だった。

「早く建物の中に入るぞ」

真田はそう言ってくるが、湊はその建物に入る気はない。雨合羽の懐から二本のバトルナイフを取り出し、両手に持ち戦闘の準備をする。

「お、おい！」
「早く仲間でも呼んで来い。だからここに来たんだろう？」

湊は真田にそう言って、すぐにシャドウの軍に体を向ける。たかが二本のバトルナイフではどうこう出来る相手ではない。

「すぅ…」

湊はその大軍と戦うこと決心したのか、落ち着いた深呼吸をする。そして少しでも距離を開けるためか後ろに跳躍し、両手のバトルナイフの構えなおす。

「来い――――ってあれ？」

しかし、気合を入れたにも関わらずシャドウは湊の方を向かない。ただジーッと建物を見ていて、湊を襲う気はないようにだ。

「…何かあるのか？」

湊は体勢を戻し、バトルナイフを雨合羽に仕舞う。そしてシャドウと同じように建物を見る。が、やはりそこには何も感じない。

「――――これは、思った以上に多いな」

その時、不意にその建物の扉から女性の声が聞こえる。

「…桐条美鶴」

湊はその美鶴を見て驚いたのか、唖然とそう呟いた。

「む、あれが例の？」

「ああ、どうやら生きてるらしい」

美鶴は湊に気づき、真田と何か話している。

（シャドウの目的が俺じゃなくなったのなら、これ以上つき合う必要はないが…少し気になるな、あのシャドウの行動）

湊はそう思うと、すぐに彼女等に背を向けて走り出した。

「ま、待て！」

「今はこっちの対処だ、明彦！」

「！…ああ、わかった」

真田と美鶴は互いに召喚器を抜き、額に当てトリガーを引いた。

「…あれが桐条の跡取りの実力か」

◇

美鶴達が戦って守っている建物の向かいの建物の屋上。そこから湊は監視するように二人の戦いを見ていた。
その戦いはもう終わるのに時間がかからないだろう。それほど彼女等の力は強いということだ。が

「？…あのでかいシャドウがいない」

湊が言うように、あの何本も剣を持ったシャドウの姿はない…と思ったら、器用に建物の壁を登っていた。
そして、その先にある屋上に誰かがいるのも同時に気づく。

「あれは？岳羽ゆかりと有里葵？…しかしあのままだと」

そう言ってるうちに、彼女等とシャドウは対面してしまった。さすがに助けようとしたのか、湊は再びバトルナイフを取り出す。
だがゆかりが取り出した召喚器を見て、彼は足を止める。どうやら彼女も力があるらしい。

「しかし、何か動きがぎこちないな」

湊はそう言いながら、バトルナイフを仕舞おうとするが、ピタリとその動作を止める。

そう動きがぎこちないということは———

「きゃあ」
「まだ呼べないのか！」

湊が気付いたが、時はすでに遅い。ゆかりの手から召喚器は離れ、シャドウはゆかりを襲う気満々で近寄って行く。

「糞、間に合え」

湊は数歩下がり、助走をつけて建物から建物飛び移る。

がその途中、葵が落ちていた召喚器を額につける。そして小さく呟いた「ペルソナ」と

「！！」

湊は何とか着地に成功するが、その状況に驚く。それと同時に

――――ドクン

嫌な心音が彼の中に響く。彼は走った時よりも汗をかき、胸元を押さえ蹲る。

「っあ！」

湊は蹲りながらも、顔は葵達に向けていた。そこには葵が呼び出したペルソナ“オルフェウス”が引き裂かれ、中から違う者が出てきた。そしてあっという間にでかいシャドウを引きさいてしまった。

そして、すぐにこちらに視線を送っているような動作をする。

――――ドクン　――――ドクン　――――ドクン

それを見た瞬間、心音が加速する。湊はそれを鎮めるように努めるが、それは叶わない。

「…あ、ぐ」

しかし、あれから目を離すわけにはいかない。そう自分の本能が叫んでいる。

しかし、それはすぐに元の姿、オルフェウスに戻ってしまった。それと同時に自分を縛っていた心音はなくなり、湊はすぐに立ち上がれる事が出来た。

「これ、は？な――」

「い、いや、来ないで！」

湊は呆けて自分の手を見ていると、ゆかりの声が聞こえたのでそちらを見るとまだ生き残りがいたようで、彼女を襲おうとしている。

湊は手に持っていたバトルナイフを投げつけ、そのうちの一体を仕留める。

「■■■■」

シャドウは叫び声を出しながら霧のように消えて行く。

「…誰？」

葵はすぐにこちらに気づき質問するが、答える義理はない。湊は

すぐに隣のビルに飛び移っていき、姿を眩ました。

「あ、ちょっと！…ど、どんな運動神経よ」

ゆかりは彼の行動を見て、信じられないようなものを見たかのようにそういう。

パタン

そう言ってるうちに、目の前の葵が音を立てて床に倒れる。

「ちょ、ちょっと！大丈夫！」

ゆかりは慌てて彼女の元に近寄るが、葵は目を覚まさない。

「お願い、目を開けてよ！開けてってばー！」

その叫びは空に響いた。

ep 04

湊はふと目を開けると、青い一室の中にある立派なイスに座っていた。

「！？」

その光景が普通じゃないのがすぐにわかり、湊はすぐにボヤケタ意識を覚まし周りを確認しようと立ち上がろうとするが

「ご心配召されるな。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所…現実のあなたは眠っておられる」

それは老人の声によって止められる。目を開けた時は気づかなかったが、目の前には妙に鼻が長い老人が座っている。その横にはエ

リザベスが立っているのも確認できた。

「…はぁ……誰だ？」

湊は一旦溜息をつき、落ち着きを取り戻しながら座り直し、目の前に老人に質問する。

「私の名前はイゴールと申します。あなたも契約をし、力に目覚められた…はずなのですが、どうやらその力は別に働いているご様子。それでは私等のお力は必要ないかと…いえ、今は必要ないかと思われます」

「…まず俺が何時契約したと聞いとこうか？」

湊はイスの手すりに手を置き、めんどくさそうな顔に手を当てる。

「その答えは貴方様が昔の記憶を思い出した時に自ずと出てくるでしょう」

イゴールのその言葉に驚き、立ち上がる。

「お前！お――」

「それでは、またのお越しをお待ちしております」

湊はイゴールに近寄ろうと足を前に出そうとしたが、イゴールの言葉を最後に湊の意識は黒く染まった。

◇

「待て！…？」

湊の声が家に響く。
イゴールに伸ばした手は空しく宙に浮いていた。

「ゆ、め？」

湊は上半身を上げ、その手を見る。そして大きなため息をつき、頭を両手で押さえる。

「何が契約だ。恥ずかしい」

そう言うと、髪をボサボサと掻きながら床に足につけ立ち上がる。
そして時計を見ると、もうすでに家を出なければいけない時間だった。

「…学校いこ」

そう言って、バックを置いてあった場所に視線をやるが、そこにバックはなく、一つの封筒が置いてあった。

「…ああ、今日は十二日か。って、だからあの人は勝手に人の家に入るなと」

湊はそう言いながら、その封筒の中を確かめる。そこには結構な大金が入っていた。

「…本当にあの人は何者なんだろう？」

湊がエリザベスと会って一年は経つが、彼はどうも彼女の事がよくわからない。

「――そういえば、あの夢にもいたな……いや、まさかな」

湊はそう呟いて、制服の袖に腕を通した。

ｅｐ０４

あの日…四月九日から三日が経った。
あれだけ不調だった体は、嘘のように調子はよかった。しかし、九日の次日から学校には有里　葵の姿はなかった。

多分ショックで気を失ってるだけだろう。目覚め立てのペルソナ使いにはよくあることだ。
岳羽ゆかりの様子は少し妙だが、死んではないのだろう。

湊はそう考えをまとめながら、学校に入りげた箱に靴を入れる。

「おっす！湊」
「…おはよう、順平」

後ろから強めに叩かれ、げた箱に頭をぶつけながら順平に挨拶を返す。怒っている視線を順平に向けるが、それを健やかに笑って流している。

「何でそんなテンションで持つんだお前は…ん？」

頭を押さえながら後ろを向くと、順平だけじゃなくもう一人の生徒が立っていた。
その生徒の名は友近健二（ともちかけんじ）と言い、順平の友人である。
湊は友近と少ししか話したことがないが、互いの事はそれなりに知っているつもりだった。

「よ、湊。お久ー」
「同じクラスで久しぶりもないだ、ろ！」

湊はそう言って、仕返し代わりに順平の後ろから頭を叩き。順平は「うが！」と悲鳴をあげながらげた箱に頭をぶつけ、地面に倒れる。

「いや、お前とこうして話すのは…半年振りじゃね？だから」

「？話さないといけないのか？」

友近の言葉に不思議そうに答える。友近は相変わらずだなというように笑いながら、上履きにはきかえる。

「お前もう少し人と話した方がいいぜ？せっかく元はいいってのに…っていうかお前、有里葵とどういう関係なわけ？」

「…お前こそよくわからんのは相変わらずらしいな。そういうことを俺に振ってくる所とか。俺がお前の思ってるような事する人間じゃないって知ってるだろう」

湊の言葉に、友近といつの間にか生き残った順平二人は「確かに」と頷く。

それに少し引っかかったが、まぁどうでもいいかと納得し教室に向かう…前に購買に向かった。

「あ、ちょっと待てよ。俺も購買で朝飯かうから一緒に行くって」

「…お前等飯食ってから学校こいよ」

友近が部活もやってない二人に呆れた風にそう言った。

友近は一旦別れ、二人は購買でそれぞれパンを買っていた。

「…ところでさ、本当のとこどうなのよ。お前？」
「何が？」
いきなりの順平の言葉に湊は興味なさそうに答える。
「いや、葵っちの事。友近じゃないけど、お前が女子を呼び捨てにするなんて珍しいじゃん」
順平はそう言うが、湊の冷静な態度を変えず口を開く。
「あれは葵に呼び捨てにしろと言われただけだ。断る理由もなかったからそうしてるだけだ」
「じゃあ、本当に何もないわけ？」
「あっちもそんな感じじゃないかな」
そう言いながら、湊達は教室に向かうため階段を昇る。
「っていうより、何の用？」
「は？だから朝飯買いに――――」
「順平がわざわざ朝飯食う人間じゃないことぐらいは俺でも知っている。俺はわざわざ俺と一緒に昼飯買うか聞いているんだけど？」
その言葉に順平はピタリと階段を止める。
「い、いや…その八日にさ、お前の家行ったじゃん？その後さ、その～」
どうやら今頃になって影時間の後の事が気になるらしい。

本来、影時間で起きた出来事は勝手に違う事に置き換えられ、一般人に記憶される。

順平はその事を知らないのか、そんな事を聞いてくる。

「…あの後すぐに帰ったろ？俺も用事があったから外に出たじゃないか」

湊はそう言って、両手いっぱいに持った三色コロネを一個順平に渡す。

「ま、いろいろ大変だろうけど頑張れ」

「へ？…あ、いやそう言う事じゃないだが。俺、寮暮らしになって、その…」

順平は湊が順平の家庭問題の事を言ってるんだと勘違いしている事に気づいた湊は小さく笑い

「だからだ」

小さくそう呟いた。

「は？どういうこと？」

「さぁ…ほら、さっさと教室行こう」

湊の小さい呟きが聞こえた順平は聞き返すが、湊が答えるわけもなく、そのまま教室に向かう。

順平はそれを慌てて追いかけたのであった。

◇

授業が終わり、放課後。

「おろ？ゆかりっちもう帰えんの？部活は？」

湊の席の近くで順平がそう声をあげていた。湊は何となく後ろを向きその様子を見る。そこには意外そうな顔でゆかりを引き留めてる姿があった。

「ちょっと用事があるのよ」

ゆかりはそれだけ言って、さっさと教室を出て行く。湊はどうせ葵の看病にでも行くのだろうと予想できたので、すぐに立ち上がり自分も帰ろうとするが…

「ちょっと待ったぁ！」

何故か順平に大声で止められてしまった。

「…何？」

「いや、ちょっと用があって…ってか、お前さっきこっち向いたよな？じゃあ気になるってことだよな？」

「どんな絡み方…っていうかだったら何？」

「一緒に後付けてみるか！？」

そう言ってサムズアップしてくる順平に湊は無言でボディブローを返す。

「ごはぁ…う、嘘。冗談だよ。そんな事したら後が怖いじゃん」
「じゃあ何？用があるから引きとめたんだろ？」
湊は少し怒ったのか鋭い視線を順平に向ける。
「あ、朝に寮に引っ越すって言ったじゃん。その荷物まとめると手伝ってくれよ。明日でもいいからさ」
順平は痛そうに腹を押さえながら苦しそうな声を出す。
「…対価は？」
「あ、やっぱりそうくる」
湊の言葉に順平は苦笑いを返しながらそう言う。そして少し考える動作をする。
「じゃあ、夕飯奢るのは？」
「…まぁ、手伝いぐらいの対価はそれで充分すぎる。で、何時？俺は今日でも明日でもどっちでもいいけど？」
湊はそう言って納得し、鞄を持ちなおし順平に問いかける。
「じゃあ、今――っておろ？」
順平は言葉の途中で地面に視線をやって途端言葉を止める。
「どうした？」
「これ、ゆかりっちの携帯だな」
順平が地面に手を伸ばし、手に持ったのは確かにゆかりが何時も

使っている携帯だった。

「…それが？」

「いや、それがってお前…少しは心配とかする気持ちはないのかね」

「はいはい。さっさと先生に渡しに行くぞ」

湊はそう言って教室から出て行こうとする。

「いや、まだ間に合うだろ？」

「…今から？無理じゃないか？」

湊は呆れた声でそう言ったあと直ぐに教室の扉を開こうとするが、そのドアは勝手に開いた。

「———あ」

湊はすぐに目が入ってきた人物を見て、少し驚いたのか動きを止める。

「？済まないが伊織順平という生徒を読んでくれないか？」

入ってきたのは真田だった。湊はすぐに揺らいだ心を落ち着かせ、口を開こうとするが、

「あれ、真田先輩じゃないっすか！どうしたんすか？」

「何だすぐそこにいたのか。スマンな」

真田はそう言って、湊の肩に手を置いて教室に入ってくる。その瞬間クラスの女子だろうか、ガヤガヤと騒ぎ始めている。

「…」

湊は無言で真田が歩いていった方向を見る。

（これは…不味いな）

真田がこの学校の人間だということは解っていたが、湊とは関係がないので会うことはないだろうと思っていた。しかし、今は順平つながりで会うかもしれない。

あの雨合羽で顔は騙せても、声までは騙せられない…背格好と合わせて疑われるかもしれない。

（まぁ、ばれてもどうにもならな———）

「おーい、湊。お前はどうする？」

「はい？」

そんな事を考えてると、順平が不意に声を掛けてくる。

「な、何だよ？」

「いや、だから俺はこの携帯ゆかりっちに渡しに行くけど、お前も一緒に行っても…いいっすよね？」

順平が真田に質問すると、真田は頷き許可が下りる。

「だって、どうする？」

「片づけは？」

「そのあと」

「……わかった。行こう」

湊はそう言って教室を出る。

「あ、ちょ、待ってて！…すみません、アイツ少し変わった性格で」
「――…あ、ああ、わかった。しかし、伊織。影時間の話しはＮＧだぞ」
「わかってますって、じゃあ行きましょ」
順平がそう言うと、２人は湊を追うように教室を出て行った。

真田に連れられてきた場所は辰巳記念病院。そこには今から帰ろうとしている岳羽ゆかりの姿があった。

「あ、真田先輩と…何で順平と湊君が？」

三人の姿を見たゆかりは驚いた顔をする。

「これ、ゆかりっち落としたっしょ。真田先輩にそう言ったらここに来たってわけ」

「…」

順平はそう言って、ゆかりの携帯を渡す。湊はそれを見て黙っている。

「あ、ありがとう…ってそうじゃなくて！先輩」

「このくらいいいだろう。それにこの方が手間が省ける」

「は？」

ゆかりは意味がわからず呆けた顔をするが、真田は構わず湊の方を向く。

「済まないが、お前はここで待ってくれないか。少し伊織に用がある」

「…どうぞ」

湊はそう言うと、順平はゴメンと言いたいような動作しながら真田についていった。

「…」

湊は無言でそれを見送り、近くにあったベンチに座り、目を瞑る。

「いい天気だ」

そう気持よさそうにそういった。

◇

「で、何でここに順平がいるんですか？」

病院の一室のドアの手前。ゆかりは真田にそう質問する。

「ああ、こいつと知り合いだったんだな。こいつは新しい仲間だ」

「…はぁ！？」

ゆかりは驚いた顔で順平を振り向く。そこには「あはは」と軽い笑いをする順平の姿があった。

「コイツはもう仲間になることは決定している。そこでお前等に聞きたいことがあってな。ついでだと思って連れてきた」

真田はゆかりや順平の事など気にせず、自分の話を進める。

「聞きたいことっすか？」

「ああ、この写真を見てくれ」

真田はポケットから二枚の写真を取り出し、二人に見せる。

「この人、前に助けてくれた…」

真田が見せた写真には巨大なシャドウが襲ってきた日に自分達を助けてくれた黒い雨合羽の人間が写っていた。

「そうか岳羽は一度会っていたな」

「？…そいつがどうかしたんですか？」

「ああ、こいつは背丈と声からして俺達と同じぐらいの歳だろう。何か心当たりがあったら美鶴か俺に教えてくれという話だ」

真田はそう言って、それぞれ二人に写真を渡す。

「教えてくれって、まさか捕まえるんですか！？」

ゆかりは驚きながらも信じられない表情で真田を見る。それに対し真田は残念そうに顔を横に振る。

「美鶴は『彼に敵意がない以上、こちらかの攻撃は許可できない』らしい」

「な、なんか残念そうっすね」

順平がそう言うと真田は「当たり前だ」と言う風にこくりと頷く。

「そいつには逃げられてばかりで貸しもあるしな…だが、俺だって助けてもらった恩を拳で返そうとは思っていない。とにかく、話を聞きたいだけだ。納得したか岳羽」

「う〝…その、何で話しを聞きたいんですか？」

ゆかりはそう言って食い下がるが、真田はそれに呆れた表情になり口を開く。

「おいおい、お前だって見ただろ。そいつは影時間で動いてシャドウを倒した。十分に素質はある」

「…仲間にするだけの勧誘なら――」

「確かにそんな事だけ言うためなら、わざわざお前たちに探させる必要はない。だが、理事長が言うにはそいつの場合知らないはずの知識を色々知りすぎてる。野放しにするわけにはいかないらしいぞ

？」

そこまで言われたらゆかりは何も言えないのか、「そ、そうですか」と一言いって黙ってしまう。

「伊織は質問はないか？」

「うぇ！？…心当たりの人間がいたら報告しろってことですよね？でも、こんな変人近くにいないと思うっすけど、了解しました」

順平は帽子越しに頭をボリボリと掻きながらそう言った。

「へくち！…誰か噂でもしてるのかね」

快晴の空の下、湊は小さくくしゃみをしながら顔を上に向けながらそう呟く。

（まぁ、十中八九してるんだろうけどな。あの病院の中で）

湊はそう思って、病院の方を見る。そこは一見普通の病院だが…真田やゆかりの様子を見ると桐条グループの息がかかったところなんだろう。ここには絶対こないようにしようと心に決める湊であった。

「おい」

「……なんですか？」

そんな事を思っていると、目の前から声を掛けられる。てっきりそのまま通り過ぎると思っていたため、湊は少し戸惑ってしまうが返事はする。

湊に目の前には赤いコートを着た荒垣が立っていた。

「“あれ”ですか？早すぎません？」

「違う…報酬、お前のところに入れといた。後で確認しとけ」

それだけ言うと、荒垣はスタスタと駅の方に去っていった。

「律儀…だね」

そうとだけ言うと、湊は立ち上がる。それと同時に病院の出入り口には真田達と話が終わった順平が立っていた。

「お！待ってたか。関心関心」

湊に気づき、片手を上げながらそう言って偉そうにこちらに近寄ってくる順平。

湊はそれを見て、呆れた表情で口を開く。

「こっちは食事のためだ…それで、話は終わったのか？」

「おう！でも内緒なんだぜ☆」

「…はいはい。それで、今からその引っ越しの手伝いしなきゃならないのか？」

「できれば…お願いします」

湊はそれを聞くと、大きな溜息をする。

「そのあからさま『メンドクサイ』みたいな溜息やめない？」

「みたいじゃなくて、その通りなんだが…まぁ、どうでもいいか。とっとと終わらせようか」

湊はそう言って、先に歩こうとするが不意に順平が話しかける。

「そういやさ、さっきお前誰かと話てなかった？知り合い？」

その言葉に湊は足を止める。そしてゆっくり顔だけ振り返り

「時期にわかるさ」

それだけ言って、足を進めた。

「は？お前今日ちょっとおかしすぎだろ…ってちょっと待て！俺を

おいてくなー！」

順平はそう叫びながら湊の後を追いかけるのであった。

ep　05（前書き）

今回のお話は真田さんのキャラがいつも以上に崩壊してるかもしれません。それがいやな人は見ないことをおすすめします。

ep 05

四月十八日

その日、有里　葵は少し疲れた顔で登校していた。

本来なら彼女は一週間ほど休んでおり、登校拒否の生徒じゃないのだからこんな顔にはならないはずだ。

では何故、彼女がこんな疲れた顔をしているのだろうか？

それにはいろいろと理由があるが、一番大きいのは自分が倒れた日に起きた出来事だろう。先程ゆかりに“今日の夜、寮の四階に来てほしいって”という伝言を言われた。
正直、自分がこれからどうなるのか不安なのだ。

「おっす！葵っち！」

そんな時、順平が後から声を掛けられ、肩を軽く叩かれる。葵は肩を叩かれて体をグラつかせる。

「お、おおい！？そんな強く叩いてないぞ？」
「あれぇ～？何だ～順平か～？お久しぶり～」

順平は体をグラつかせている慌てて声をかけるが、当の葵はふにゃふにゃと挨拶を返す。

「お～い、生きてるか～？…何だお前休みボケか？」

順平がそう言うと、葵は今まで少し曲がっていた背を伸ばし、考えるような表情をし口を開ける。

「や～、なんて言うか…これからの未来に少し不安を…」
「な、何か知らんが、頑張れよ…ってかそうだ。お前ゆかりっちから伝言聞いた？」
「は？何それ？」

葵はいきなりの言葉に顔を傾ける。

「何だ聞いてないのかよ。じゃあ言うわけにはいかねぇな」
「…ちょっと、気になるだけど」

葵はジト眼で順平を見るが、順平はそんな事気にせず無視して通り過ぎようとしている青髪の少年の肩を持ち挨拶をし始めている。

「…はぁ」

葵はそんな順平を見て小さく溜息をつき。不満な表情をするが、すぐにハッとし、顔を両手で叩く。

そしてすぐに順平と同じように青髪の少年に話しかける葵であった。

ｅｐ　０５

白井湊は何時も通り、通学路を片手にバックを持って歩いていた。眠そうな顔で大きな欠伸をしていると、校門の前で順平と葵が話しあっているのがちらりと見えた。
湊は本当に仲がいいなと思いながら、その隣を無言で通りぬけようとする…が

「おっはよう！」

順平に半ば叩かれてぎみで挨拶される。湊は不意打ちだったため体勢を崩す。
そして体勢を整え、順平を睨んだ。しかし、そんな視線には目もくれず校舎の中に入って行く順平。

湊は別にどうでもいいと思ったのか、順平の後を追うように玄関に向かうが、

「おっはよう！」

それは再び同じ様な挨拶で止められる。今度は少し耐性があったためそこまで体勢は崩れなかった。

「…何で君達はそんな挨拶するんだ？」

湊は叩かれた肩をコキコキと鳴らしながら、再び後に顔を向ける。そこには湊の予想通りなのか、葵が笑顔でこちらを見ていた。

「だって、湊君にはこれぐらいしないと…ねぇ？」

「俺に聞かないで――――」

湊は言葉を途中で止め、葵の顔をじーっと見つめる。

「な、何…かな？」

葵はじーっと見られることに照れたのか顔を少し赤くして、慌て始める。

「…いや、別に。ただ――――何か調子悪そうだなって思っただけだよ。なんとなく」

湊のその言葉に葵は一瞬だけ顔を凍らすが、すぐに「そんな事ないよ」と笑顔で返す。それを見逃すわけもない湊だが、この子はこれ以上つっこまれたくないのだろうと自己完結し、

「あ、そう」

とだけ言って今度こそ校舎の中に入って行く湊だった。葵はそれを「待ってよ〜！」と声を出して追いかけた。

湊は玄関に入り、自分の靴をげた箱に入れようとする。しかし、それは自分の靴の領域しかないはずの場所に見知らずの一枚の紙が置かれていた。

「…？」

湊はそれを無言で掴み、その手で上履きを取り床に落とす。そしてそれを履きながら紙の内容を見ようと思い目を通そうとする。

「何々、何の手紙？」

「！！」

何時までも玄関に突っ立ている湊を変に思ったのか、葵は湊のその紙に書かれた内容を読もうとする。

湊はすぐにその紙を葵に隠すようにポケットにしまう。

「あ、ごめん…」

葵は勝手に呼んだことを不快にさせたのかと思い謝ってくる。湊は別に不快になってはいないが、この文を全部読まれるのは都合は

悪いと思い、否定せずに上履きをはき切る。
「その、もしかして大事な手紙だった？」
「いや……ただの悪戯」
湊は少しの間を置いてそう言うが、逆に何か怪しくなってしまったらしく、葵から変な視線で見られている。
「…はっ！これはもしや、これが噂のラブ――」
「こんなメモ用紙で済ませるラブレターなんてあってたまるか」
葵の言葉に呆れてそう返す湊。葵は「え？そうなの？」と真剣な顔でそう呟き、悩み始めた。
――別に彼の主観で言っただけで、本当はどうかわからないのだが…
そんなアホなやり取りをしているとチャイムがなり始めた。
「…あれ？これってもしかして」
「ＨＲが始まる合図だな」
湊の言葉を聞いた葵は顔をサーッと青くし、慌てて階段の方に走って行く。そして「君も早くしたほうがいいよ～」と言いながら階段を上って行った。
湊はその後姿を見て、溜息をつきポケットから葵から隠した紙を取り出した。
そこには見覚えのある文字で

――――影時間に神社の前で待っていてください

とだけ書かれていた。

◇

放課後

湊は何時もの帰り道を帰っていた。今日何を食おうかと考えている時に変な視線を感じ、湊は足を止め、くるりと視線を後ろに向ける

しかし、そこには別に何も―――なくはなく、見覚えがある男の姿が建物の物影に見える。

「…」

湊はてくてくとゆっくりとそこに近づき、そこにいる男の姿を確認し呆れた表情で

「何してんですか？順平…と真田先輩？」

湊がそう言うとおり、そこには苦笑いの順平と湊と同じ様に呆れた表情の真田が立っていた。

「あ、あはははは。いやー、別に後を付けていただけじゃ―こふ！？」

順平が慌てて何かを口走ろうとするが、真田の拳骨を喰らい頭を抱えて蹲る。

「…俺がお前に聞きたい事があってな。それでこんな真似するはめになった」

真田がそう言うと、湊はぴくりと体を振るわせる。

「―――…ならここで聞けばいい。何か御用ですか？」

湊は笑ってそう聞くが、真田は逆に険しい顔で湊を睨む。

「…あ、あの～。と、とにかくここで話し会うのやめません？」

順平が地面にひれ伏している状態で恐る恐る手を上げて、そう提案する。

…確かに、今の状況は道通りを通る人たちの注目の的となっている。これは恥ずかしい。

「…わかりました。俺の家に来てください。用があるのは二人ですか？」

「あ、いや。俺はただ真田先輩にお前の家に案内するつもりだけだったし」

…それが何で後をつける風になったのだろうか？と思いはしたが、どうせ順平が変な事を思いついたのだろう。これ以上言っても意味

はないだろう。

「何もない家なんですが…」

「こっちが色々と文句を言えるような立場じゃないが…」

真田はそう言うと、順平に一度視線を送る。順平は「わかってますって」と言うように頷き、湊の肩をつかみひそひそ話をするようにしゃがみ込む。

「変なこととして、わりぃな。でも真田さんは悪くないぞ。これは俺の思いつきであってだな――」

「そんな事はわかってる。それより俺とあの人にそんな接点ないはずだ。何の用がある？」

「さぁな、俺も詳しくは聞かされてないんだけどな…たぶん、お前の叔母さんの事を聞きたいんじゃないか？ほら、あの人桐条先輩と仲いいじゃん。それでじゃね」

どうやら順平は最後の方以外は嘘は言ってないようだ。順平は嘘をつくのは下手なのですぐにわかったりする。

「…わかった。それで、君は友達をタダで売ったわけか？」

「うぇ！？い、いや売るとかじゃなくてだな！…え～っと、もしかしてやばい？」

湊は順平がそんな事を思って真田に自分の家の事を言ったわけではないことを知っている。そもそも彼はあの“白婆”の事を別に人に知られてもいいような態度を順平にしていた。そこから別に教えてもＯＫと思ったのだろう。

「冗談だ」

「うぉーい！マジで焦ったぞ！」

湊の言葉に大声で突っ込みを入れる順平。湊はそれに小さい笑いを返し、真田の方を見る。

「話しは大体わかりました。先程も言いましたが何もない家ですが、どうぞ」

「こちっもさっき言ったが、こっちが色々と文句を言える立場じゃない。気にする必要はないさ…それじゃあな、伊織。明日は早めに来いよ。わかったな」

真田がそう言うと、順平は「了解っす」とだけ言って2人に手を振りながら去っていった。

◇

それから少しして、湊の家の前。そこには湊と真田の姿があった。

「…ここで二年前から一人で住んでいるのか？」

真田は不意に浮かんだ疑問を湊に言うが、これは聞くべきではなかったのではと、遅いが気づいてしまう。

「ええ、こっちの方が自由にできますし。お金はバイトで何とかできますし」

しかし湊はそんな真田の思考なぞ気にせず、そう答える。

どうやら、そんなに故人の事は引きずってないのか？そう思う真田だが、それは聞くはおろか、思うのも湊に失礼に値するかもしれない。

「真田先輩？入らないんですか？」

真田が思考にふけっていると、何時も間にか湊は家の扉を開けてこちらを不思議そうな顔で見ている。

「――――…ああ、すまん」

真田静かにそう答えると、家の中に入る。それと同時に絶句する。

積まれた紙束のせいで足場のない廊下――――――そう、あまりにも…汚すぎる。

いや、その表現はおかしいのかもしれない。積まれている紙束は綺麗とまでとはいかないが、それなりに整頓されて置かれている。

そんな紙束の道をすいすいと、紙束を崩さず中に入って行く湊。真田もそれについてくが、手に持っていた上着が一つの紙束を崩してしまう。

「あ」

真田はそれを戻そうとするが、その紙一枚一枚を見ても順番がまるでわからない。

「別にいいですよ。これ、全部もう必要ないんで」

「は？」

湊はそう言って奥の部屋に入って行く。真田はよくわからないが、良いと言うなら別にいいかと思いそのままほっとくことにした。

「…」

リビングらしきところに入ったら、景色は一変し紙は一枚もなく、普通の部屋の景色があった。

「やっと資料をパソコンに移したので整理しようと思いまして、何時もと逆な感じになってしまいました」

湊は独り言のようにそういいながら、ゆっくりとイスに座る。真田は立ったままなのに気づき、湊は向いにある席を指差す。それは暗に座れと言っているのだろう。真田はそれに従いそのイスに座る。

「さっき、パソコンに移したって言ったが、どういう意味だ？」

「…それが此処まで来て聞きたかったことですか？」

真田の質問に質問で返すが、それは真田の機嫌を悪くしただけだった。

「フン、冗談ですよ…俺はどうしてか、パソコンより手で書く方が集中できるんですよ。でも紙だと見ての通り場所を取るので。最初からパソコンに入れればいいんですが。やっぱり計算は手で書いた方が早い」

「…そうか」

真田はそれを聞きながら、部屋の周りを見る。その部屋の壁には黒い雨合羽が掛けられていた。

（だが、それだけでは――）

「…怪我をしてまで捜査とは…本当に戦いが好きなんですね」

「！！…お前、やはり！」

湊の言葉に真田はバッと立ち上がり、湊と距離を置く。

「何だ。本当にその気できたのか、本当に好きなんだな」

湊はそう言いながら、ゆっくりと立ち上がる。真田はそこで気づく。そもそもこんなことしにきたわけじゃないことに。

「…いや、待て。よく考えればこんなことする為に来てるわけじゃない！あ、や…その、何だ…スマン」

真田はそう言って構えた拳を下げてそう言いながら顔を背ける。

「…クッ」

湊はそう小さく笑うと、再びイスに座る。真田もそれを見て、溜息をし、同じ様に座る。そして真田は本題を言おうとする。が

「で、何ですか？仲間になれって言っても意味ないですよ。俺はもうこれ以上桐条に関わる気はない」

「――――聞く前に断るな。まぁ、断るとは思ってたがな」

先に断れた事に少し不満を言うが、どうやら言葉の通りそこまで驚いてはいないようだ。

「でしょうね。その気なら最初に会ったときにこっちから心暖かい言葉をかけている」

「まったくだ…で、理由は聞いていいのか？」

真田はやけに呆気なくそう言うと、席を立ちあがる。

「――別に。理由なんてない」
（…嘘、だな）
真田は声に出さず、心の中だけでそう言い今度は実際に口を開いて言葉を出す。
「別に俺はお前の事を美鶴に言うつもりはない」
「…それはまた何で？」
「やっやこしくなるのが目に見えてる。それにお前に悪意は感じられなかったしな」
そう言って、この部屋から出ようとする真田。湊はそれを見送ろうと立ち上がるが、真田はそれを手で止める。
「それと、これは忠告だ。あの格好で出る時は声を変えることだ…ああ、後お前の親は美鶴の所で働いていたらしいが、あの塔以上に知っていることはないか？」
「あ？……いや、そっちにある情報以上はないんじゃないか？」
湊は少しの間真剣に考えてそう言う。真田は「そうか」とだけ言って部屋を出て行こうとする。
「待て」
「？」
「今度はこっちが質問。あんたのやってることは裏切りだ。あんたにそこまでされる程関係はもってな――」
「お前馬鹿だな」
言葉の途中で真剣な顔で「馬鹿」といわれてしまった湊はガクッと頭を落とす。

「ふん、あの夜の借りを返しただけだ。勘違いするな…それとこっちに被害をもたらすなら」
「了解しました」

湊がそう言うと、真田はそのまま家を出て行った。湊はその姿をリビングのドアから見て

「借り、ね…はたしてどうかな。と、いうより確かに声はどうにかしなきゃな。あの人に解るくらいじゃ桐条の跡取りにもわかるだろう。どうでもいいが、めんどくさそうなのは御免だからな」

そう言って、リビングの中に入って行った。

帰り道。

真田は少しの笑顔で帰り道を歩いていた。すでに日は落ちかけており、空は綺麗に赤く染まっていた。

（アイツは意味もなく人を傷つけない。それにこっちの邪魔もしない。なら報告しなくても害はないだろ……――――ああ、これでいい。そうじゃないとアイツと戦えない）

その思っている真田の笑顔は少し恐ろしく思えた。

ep　05（後書き）

これ、真田違うよ…そう、思いましたので今回はキャラ崩壊があると注意書きに書いときました（自分主観で、ですが）。

というより、話が進んでないというこの不始末。問題だよ？…うん。がんばる。

ep 06

日にちが変わる瞬間…影時間はやってくる。

その時間にまだ慣れてない有里　葵は「はぁ」とベットの上で大きいため息をついた。

その顔は機嫌がいいとは言えるものではないのは確かだった。

何故そんな事に？

それを話すには数時間前に学園長と巌戸台分寮の寮生達の会話に原因がある。

その内容は一言で言うなら“仲間になってほしい”というものだった。事情を聞いて先輩達がやっていることを否定する気もないし、自分に力があって協力するのは当たり前だとも思ってはいる。当たり前かのように承諾はした…しかし――

「…私で大丈夫なのかな」

そう小さく呟いて、枕をギュッと抱える。

どうやら彼女は自分がそんな大事をできる人間なのか不安になっているようだ。

『やあ、元気――とは言えないみたいだね』

「うひゃあ！」

いきなり声をかけられて葵はベットの上で飛び上る。慌てて声の方に振りかえると、そこには見覚えのある男の子がニコニコと笑ってこちらを見ていた。

葵はこの子供に見覚えがあった。それは初めてこの寮に来た時に妙な署名を書かされた時にその署名を渡してきたのはこの少年だった。

「…き、君。何処から入ってきたの！？っていうか何でこの時間で動けるの！？っていうか何でこの時間で動けるの！？」

葵は混乱ぎみに…いや、間違いなく混乱しながら顔を左右に振りながら幾つもの疑問を投げかける。

『そ、そんなに質問されても答えきれないよ…一つ答えると、僕は何時だって君の傍にいるよ…ふふ』

謎の少年は可笑しそうに小さく笑って、言葉を続ける。

『…もうすぐ“終わり”が来る』

と、そんな事を言い出した。普通なら、この子の頭を心配すると事だが、今の状況だけにツッコミを入れれない。

『何となく思い出したんだ。だから、君に伝えなきゃと思って』

「あ、それはどうも……あの、一つ聞いていい？“終わり”って何？」

『え？“全ての”終わりのことだよ…っていっても、僕もハッキリとは分かんないんだけどね』

少年は小さく笑うのをやめ、今度は少し視線を外しそう話しかけてくる。その表情は少し悲しそうに彼女は見えた。

『…そんな事より、とうとう君も“力”を手に入れたみたいだね。それも彼とはまた違う、変わった力みたいだ。何にでもなれ、何にも属さぬ力…それはやがて“切り札（ジョーカー）”にもなる力だ。君のあり方次第でね』

「そ、そうなの？」

葵は“彼”とい言葉に疑問を抱いたが、少年の不思議な気に押され、それしか呟けなかった。

『初めて会ったときのこと覚えてる？』

そりゃ、あんな出会い方して忘れる人は少ないだろう…とは言えない。

『交わした約束は、ちゃんと果たしてもらうよ』

彼の言う約束とは“自分の選択に責任を持つこと”というものだった。

そんなことは今までもやってきたつもりだ。そう思って何も考えないでサインしたが…よく思えば安易すぎたかもしれないと、今になって思った。

『僕は何時でも君を見ている。たとえ君が僕を忘れててもね…』

その言葉だけではいろいろと誤解を生むが、彼の年齢ならＯＫだろう…たぶん。

『じゃ、また会おう』

少年はそう言うと、姿を一瞬でスッと消した。

「…っていうか結局、あの子なんなの？」

その部屋でやっと冷静になった葵がそう呟いた。

ep 06

それと同時刻、神社前の少し長い階段。

そこには黒い雨合羽姿の湊が階段を昇っていた。その手には少し複雑そうな機械が握られており、彼はそれの調子を見ているようだ。

「何か調子悪いな…使えるか、これ？」

そう言っている内に階段を昇り切る。それは機械をいじっててもわかった。

湊は顔を上げ、待ち合わせの相手がいるか確かめる。

が、見えたのは心で予想していた神社の景色ではなく、待ってる人の顔しか映らなかった。

「うぇ！？」

いきなり目の前にいるエリザベスに驚き、足を踏み外しそうになるが、持ち前の運動神経で何とかバランスをとり持ちなおす。

「？どうかなさいましたか？」

「いや、別に…それより一歩下がって欲しいんですが」

あまりにエリザベスの顔が近かったため、湊はそう言いながら自

分も階段を一段降りる。

「？…ところでその手の物は？」

湊の言葉を無視し、エリザベスは湊の手に持っているものに興味を移す。

湊は自分の質問をスルーされたことに大きなため息をつき肩を落とす。

元々、この人とは半年近くの付き合いはあるが、未だにこの人との付き合い方がよくわかっていない。

（何であの塔にあるものを知ってるか謎だが…まぁ、報酬は十分だから文句はないから別にいいか）

そう思いながら、手に持った機械をエリザベスに見せるように上げる。

「白婆が使っていた簡単な変声機だ。一応影時間でも動くようになっていたんだが…少し古い物で調子が悪い」

そう言って、エリザベスにそれを渡す。エリザベスはその変声機のスイッチを入れたいのか、いろいろとそれに触っている。

「それで、あんたは何でこんな時間に俺を呼んだんだ？」

そう言いながら、階段に腰をつけ座る。しかし、エリザベスはそれに答える気はない…わけではないのだろうが、変声機に夢中になって、こちらの言葉を聞いていない。

「…はぁ、どうでもいいってわけか」

湊は顔を俯かせる。そして懐から一つの銃を取り出した。その銃は真田達が持っているものと同型に見える。

それは白婆から最初にプレゼントされた物だった。しかし、彼にはこの銃を使う意味はなかった。いや、正しくいうと“使えない”のだ。

彼がそれを額につけて撃ったとしても、真田のようなペルソナは出てこない。

何故？と言われても彼には分からない…ただ、白婆には分かっていたらしいが、彼には教えてくれなかったらしい。

「どうぞ、直りました」

物思いにふけりながら、階段から見える景色をボーっと見ていると、エリザベスが変声機を湊に差し出す。

「…」

湊は無言でそれを受け取り、変声機にスイッチをつけ自分の喉につける。

『ア、ア～…本当ニ直ッテヤガル。アンタ本当ニ何ナンダ』

湊はそこまで言うと、変声機を雨合羽に固定する作業に移る。

「…それは先日に主が言ったとおり、それは貴方が完全に目覚めた時に言おうかと思います」

エリザベスが言った言葉に湊は変声機を固定する作業をピタリと止める。その時、喉につけてたコードがとれ、地面に音を立てて落ちる。

「…あんた…何もんだ？」

再び疑問を口にするが、その疑問はどれに対しての疑問なのだろうか？エリザベスも同じように思ったのか、顔を傾ける。

「ですからそれは――」

「なんであんたが俺の夢の中身を知っている？」

彼の口にした言葉にエリザベスはさらによくわからないというような顔でそれに答える。

「あそこに私もいたのですが…気づきませんでしたか？」

そう残念そうに言うエリザベスだが、問題はそこではない。

あの夢は…現実に起こったことなのか？ならば本当にこの人間は何者なのだ？と当然の疑問を考えだす。

…しかし、それは今考えても意味のないこと。そして聞いたとしてもエリザベスは答えないのだろう。そう思い、湊はそう言うと頭を横に振りその考えを消し、口を開く。

「今はどうでもいいこと、か…それで、話は戻るけど今日は何の依頼で？」
「ええ、今回は討伐してもらいたいシャドウの討伐をと思いまして」
「…それって、前のデカイ奴ですか？」

湊は見るからに嫌そうな顔で疑問をだす。前に出たでかいシャドウとは出来ればやり合いたくない。嫌な理由にもちろん相手が強いというのもあるが、あのシャドウからは嫌な感じがしたからだ。

「デカイ？……ええ、確かに少し大きく、タルタロスの第一層にしては強力ですが…あなたからすれば簡単に討伐が可能なシャドウなのですが」
「…ま、金が貰えるのなら何でもしますがね。ひとつ質問いいですか？」

湊は頭を掻きながら、片目だけをエリザベスに向ける。

「前から意味不明な仕事が多かったですが、今回のは大体予想できる。あんた達の目的は有里葵の保護みたいなことか？」
「保護ですか？…いいえ、私達は傍観者みたいなものでございます。できるとすれば“少しのお手伝い”みたいなものだけです」

湊の言葉にまったく同様せずエリザベスは答える。この人が嘘をついているかどうかなんてわからない。

「…ま、どうでもいいですが…俺は葵が俺の答えを持ってるとは思えないんですが…まぁ、金の為にやってあげますよ」

湊はそう言って、エリザベスに背を向けて、その場所を去ってい

った。

◇

時間は変わらず、影時間。
場所はポートアイランド駅。

そこに三人の人間が立っている。それぞれ少し変わった格好をしていた。
その中の一人、白髪をした上半身が裸で見つかったらすぐに交番行きの少年が空を見上げながら口を開ける。

「今日もあの塔は美しいですね」

白髪少年、タカヤは視線の向こうにある大きな塔を見つめてそう呟くと、その後にいる頭の生え際が少し心配な少年、ジンに顔を向ける。

「それよりも、あの人から連絡はきましたか？」
「いや。あらへん。聞く話によると新しい商売相手を見つけたらしいで」
「ほう…その相手とはやはり桐条の？」
「それはわからんですけど…多分ちゃうと思いますわ。普通の学生らしいですわ」

ジンがそういうと、タカヤは少し考えるように俯く。

「…まさか」

「？なんや、心あたりでもあるんで――――って、チドリどうしたんや？」

タカヤが意味深な言い方をするものだから、ジンはそれについて質問するが、一番後ろで歩いていたゴスロリ衣裳の少女、チドリが立ち止まっていることに気づき、声をかける。

「…今、誰かがいたような気がした」

「ああ、この頃いろんな奴が目覚めたって聞いとる。そいつらちゃうか？」

「…そうかも」

チドリはそう言って、二人の近くまで歩いてくる。

「――そうですね。その彼等の事も気になりますが…その商売相手が気になりますね。一度会っときましょうか」

「わかりました。住所調べときますわ」

「ええ、頼みましたよ…それでは行きましょうか」

タカヤはそう言って静かに赤い水たまりの中を進み、あとの二人もそれに続いていった。

ep 06（後書き）

なんていうか、短くてすんませんorz

ep 07

四月二十二日

その日、伊織順平はいつもどおり学校に行き、いつもどおり寮に帰り、そのまま就寝についている…はずだった。

しかし、実際は学校…だった場所の中を走り回っていた。その姿は肩に大剣を担ぎ、とても普通の姿はなかった。

その場所の名称は“タルタロス”…その場所には月光館学園という学校があるはずなのだが、何故かそこには巨大な青い塔“タルタロス”が建っている。

しかし、彼には『何故か』なんて関係ない。今、彼にあるのは目

の前にある道を走り抜くことしか頭にない。

［伊織、少し調子が悪そうだな。無理ならすぐ報告し―］

「だ、大丈夫っす。まだ行けます」

そんなこと思っていると、通信機からは後方で情報の支援をやっている桐条美鶴からの言葉を拒否し、肩に担いでいた剣を地面に刺し、杖代わりにし体重を預ける。

［無理はするな。すぐに葵に集合をかけてもらおう…む、どうやら二人とも戦闘中だな］

「心配ないっす、俺はまだやれます！」

順平は声を大きくして訴えるが、その声のせいで疲れがあるのがバレバレである。

［駄目だ。それ以上の戦闘は許可できない。君はおとなしく―――］

「？先輩？」

いきなり言葉が切れ、通信機から音がでなくなり、順平は顔を傾ける。

「…はて？」

手に取った通信機を振ってみるが、反応はない。どうやら故障らしい。

「やばい…かな。つっても、ここら辺のシャドウは倒したはずだし。こういうときは動かないほうがいいって教えられたからな」

順平はそういって、腰を地面につき座り込み大きなため息をつく。

「はぁ……あー！なさけねー」

そう言って、顔に手を抑える。

自分はこんなにボロボロな状態なのに、リーダーである葵やゆかりもまだまだ体力に余裕があり、この階を走り回っている。自分は『男なのに』という理由がすごく情けなく…いや、悔しく感じている。

「少し運動したほうがいいな。これ…ん？」

少し自嘲気味に呟く順平だが、少し遠くから金属がぶつかり音が聞こえてくる。

「葵っちかゆかりっちか？…一応手助けしに行きますか」

順平はそういってゆっくりと立ち上がり、剣を担ぎなおす。そして音の方向に足を進めようとする。

その時、行こうとした道から何か大きい物体が雑音を立てて滑ってきた。

「…は？」

順平は何が起こったかわからず、思考を停止する。

『…ちっ…少し仕事が遅すぎたか』

そんな順平のことなど知ったことかと、道の向こうから電子音の言葉が響いてくる。

「っ！誰だ！」

順平はその言葉にハッとし、剣を言葉の人物がいるであろう場所に向けて構える。

『…』

順平の質問には答えず、無言でその道から出てきたのは片手にバトルナイフを持った雨合羽の男だった。

ep 07

時は遡り、夕方下校の時間。

白井湊は何時も通りさっさと荷物を終い、教室を出ようとドアまで足を進めようとする。

「いよっ！今日もバイトか？」

が、またまたいつものごとく順平の軽い挨拶に止められる。

「…まぁね。予想外に結構な大物だったからね。今日は大丈夫だ」

「お、大物？…何？漁師のバイトでも始めた？」

順平は湊の言葉が理解できず、顔を傾ける。その順平の顔を見た

湊は小さく笑い、バックを持ちなおしドアを開けようとする。
湊がドアに手をかける前に勢いよく開いた。そして、湊の目には有里葵がびっくりした表情で立っていた。

「び…びっくりした〜。ごめんね、湊君」
「あ、いや。こちらこそ」

こちらもいつもながらの元気な声でそう言いながら、教室に入ってくる。その葵の元気さに押され湊は出ようとしていた体を再び教室の方向に戻す。これも何時もの風景だった。

「あ、順平も一緒なんだ。もしかして、今日って寮に帰ってこないの？」
「うんにゃ…ああ、じゃあ今日タル———」

順平の言葉ではあるが、湊はピクリと体を震わす。

「ちょ、順平！…いや、今の順平の言葉は変な意味じゃなく！」

それに気づいた葵はすぐさま順平の口を押さえる。

「？…あ、ああ。わかってる」

葵の焦りがよくわからず湊は逆に変に思ったが、何を焦っているのか理解し適当に答え、携帯を開き時刻を見て、顔を濁らす。

「やばいな…間に合うか？」
「え？もしかして急いでた？ごめん邪魔だった？」
「いや。大丈夫。でもそろそろヤバいから行くけど…その手話さないと死ぬよ？」

「へ？」

湊に言われ、葵はパッと順平の方を見る。
そこには青い顔でモガモガとぐったりとしている順平の姿が…

「きゃー！順平！」

葵はすぐに口から手を離し、順平の襟もとを持って順平をブンブンと揺さぶる。その度に順平の顔はドンドンと青くなっていく

「いや、その手を離せば……いや、もういいや」

湊は葵の暴走を止めるのをあきらめ、教室を出る。

「きゃ」
「っ…またか」

教室から出た瞬間に、誰かとぶつかり再び足を止めてしまう。

「あ、ごめん、白井君」

目の前には、少し困った顔の岳羽ゆかりの姿があった。それを見て湊は心の中で溜息をする。
彼女とはあまり接点がないが、会うたびに何か妙な空気になる…こちらとしては、あまりいい気にはならない。

「謝るのはいいから、あれ。俺の代わりに助けてくれないかな」

湊はそういって、教室の中を指差す。そこには未だに葵に体を揺さぶられ続けてる順平の姿があった。

「へ？…あ～、まったくあの子は…」

ゆかりはそう言って、溜息をつきながらも教室に入って行った。
ゆかりが締めたドアの向こうでギャアギャアと騒いでいる。それを聞いた湊は少し笑い、すぐに下校した。

◇

そして時間が経ち、影時間。

いつもの黒い雨合羽の姿で、タルタロスの中にある階段を急いで駆けあがっていた。
その後には銀色をした数体のカブト虫のようなシャドウが追ってきている。

『ちっ！しつこい！』

湊はそう言うと、袖から小さいビンを取り出し地面に強く叩きつける。

するとそこからいきなり風の渦が発生し、カブトムシのシャドウが全て吹きどばされる。

『…何なんだ。このシャドウは』

湊はそう言いながら、来た道を戻る。

前も言ったが、普通のシャドウは湊を無視する。だがあのカブトムシのシャドウやもう一体のシャドウだけは違う。何故か湊だけに攻撃を仕掛けてくる。

これは想像以上に厄介事だなと思いながら、階段の上を見る。そして一瞬で顔色を変える。

階段の上には馬のような物に乗った、ランスを持った黒騎士のような格好をしたシャドウが湊を見下ろしていた。

『…めんどうな』

湊はそう言ってすぐに方向を変え、階段を蹴る。

「■■■■■！！」

それと同時に黒騎士は轟音を上げ、湊の後を追ってくる。湊は先

程と同じ様に袖からビンを落とす。
黒騎士はそれに構わず、湊だけを殺そうと迫ってくる。そしてビンと騎士の体はぶつかる。それと同時に暴風が発生し、湊の体を飛ばし騎士の接近を遅らせた。

『っ！！』

湊は階段から少し離れたところで転がりながらも黒騎士の行動を確認する。できれば先程のようにこれで終わりがありがたい…

「――■■■■■！！」

どうやら希望通りにならないらしい。マハガルジェムぐらいの風ではどうということもないらしい。

そんな事を思っている内にも黒騎士は湊にランスを突き出して突進してくる。
湊は横に転がりながらそれを避け、雨合羽にかけてあるサーベルを引き抜く。

そして相手がまだこちらを向いてないうちに起き上がり、剣を構える。黒騎士の方もそれに少し遅れて湊の方を向き、ランスを構えなおす…どうやらただ暴走して湊を襲ってきたわけではないらしい。

『「…」』

少しの間、静寂が続く。黒騎士の方は何故動かないのかよくわからないが、湊の方は黒騎士の動きを見て、どう逃げるかを決めるため動けずにいる。
このシャドウは自分一人でどうにか出来るレベルのシャドウじゃない。自分では出力が足りない…それ以前に騎士の格好だけあって戦い方も厄介だ。

（…しかし、あいつ等に倒せるレベルでもないな）

そうだ、もともと彼女等とこれを合わせるわけにはいかない。そろそろ彼女たちもこの階に進出してくるだろう。

『じゃあ、やっぱここで倒すしかないだろうに！！』

「■■■■！」

湊は叫ぶと同時に足を踏み出す。黒騎士もそれに応じるようにランスを構えたまま突進してくる。
湊はランスを紙一重でかわしながら騎士に斬撃をくらわせる。が、しかし響くのシャドウの悲鳴ではなく、ただの金属音。

湊はすぐに地面を蹴り、前に体を転がす。そして次の瞬間、湊がいた地面はランスによってたたき割られた。
そして、そのランスを持っている黒騎士は何の傷もない。

『やっぱり効かない、か』

湊はわかっていたかのようにそう呟く。

そう、依頼を受けおってからタルタロスに入って、あのカブトムシなら倒れた。しかし、あの黒騎士は物理攻撃を得意とする湊には

相性が悪すぎたのだ。だから、今日はいろいろと準備したのだ。

『…チッ。欠けてる』

湊はサーベルの刀を見て呟きながら、空いている手の方にマハガルジェムが入ったビンを三つ指にはさむ。

「■■■■■■■■■！！」

黒騎士は再びランスを持って突進を仕掛けてくる。あれだけ一緒なことやっていればタイミングは完璧に掴める。避けるのは簡単だ。問題はあれに攻撃を通すことだ。三つもあればさすがに通ると思うのだが…残りはあとこれだけ。これでダメなら他に方法はない。

そんなことは関係なしにシャドウの突進は迫ってくる。どうやら悩む時間はないらしい。

『――くそ！』

湊は持っているサーベルを逆手に持ち、槍のように構え投げる。その攻撃は黒騎士の目のような所に当たる。

「■■■■――――！！」

黒騎士はさすがに痛かったのか、目を押さえて苦しがる。その隙を見逃すわけにはいかない。

湊はもう一つの手に挟んでいたマハガルジェムをシャドウに投げつける。

先ほどにと比べ物にならないほどの暴風が起こり、湊は地面に手をつけてそれに耐える。

黒騎士はその風には耐えきれず、吹き飛ばされていってしまった。

『！！糞！消えてない！』

これで倒せたならば飛ばされるではなく、霧のように消えるはずなのだ。生きてるのならば、このまま止めを刺さなくてはいけない！

今日はサーベルは一本しかない。後あるのはバトルナイフだけだ。それを手に持って騎士が飛ばされていった方向に走っていく。

一本道を抜けると、あの騎士はまだ倒れている。しかし、その近くには見たことのある人が立っている。

『…ちっ…少し仕事が遅すぎたか』

湊は心底めんどくさそうにそう呟いたのであった。

『…』

順平の前に現れた雨合羽姿の湊は相も変わらず黒騎士を見る。すでに体勢を立て直しているが、どうやら先程の攻撃は大きなダメージがあったらしい。騎士の動きに違和感がある。

「お、おい、お前もしかして写真の――――！！何だこれ？」

順平はそう言って、すぐに剣を騎士の方向に構えなおす。

『…おい、じゅ――お前。スキルを持ってるか？』

「あ？いや、アギぐらいしか…ってお前、これ何なんだよ！？」

『見てわかれ。シャドウだ』

「んな」

順平の言葉を適当に答えながら、順平の持ってるスキルさえあればなんとかできるかもしれない。

…もう報酬もくそもないだろう。ここは順平を生きてかえらすほうが優先だ。

『おい、残りＳＰは？』

「…ちっ、空だよ！」

…それはやばいな。と思っている所にも騎士は再び突進をかましてくる。

『くっ』

「うお！」

順平の襟もとを掴み、横に飛びランスの攻撃を避ける。

『ああ、糞。めんどくさい…おい、じゅ…お前！逃げろ！』

湊はそう言ってナイフを構える。

「…んなもん、できそうな空気じゃねーだろ」

しかし、何を思ったか順平は剣を構え戦う準備をし始める。

『――やめとけ。あれは今のお前や俺では相性が悪い』

「は？相性？…んなもんどうにかなるだろ。っていうかするしかないっしょ」

…確かにここまで来たらそれしかない。しかし順平を巻き込むわけには…

「オルフェウス！」

不意に響く凛とした声。それと同時に黒騎士の背中に炎が発生し爆発する。

不意を突かれたためか、それとも先程の湊の攻撃のおかげか、体

勢を崩し、こちらに倒れてくる。

『！借りるぞ！』

「うぇ！？ちょ、俺の剣！」

湊は順平の剣を掴み、構える。サーベルではあの鎧は通せない。がこの剣なら

『おおお！』

湊は横に剣を振りかぶり、倒れてくる黒騎士に斬りかける。

「■■■■――――――――――――――！！！」

その一撃が止めとなり、黒騎士は断末魔を上げ黒い霧と化していく。そして湊の持っている剣からピキという音がなる。刀身には見事なヒビが入っている。

『……悪い』

一言謝ってはいるが、順平の方を向き剣を投げて返す当たり、反省はしてない。

「ちょ、お前！これ！！」

順平が何か言っているが、そんな事どうでもいい。湊は順平がいる反対の方向を見る。

そこには有里葵と岳羽ゆかりの姿があった。

「あ、あの～大丈夫ですか？」

葵は少し困った顔で聞いてきている。どうやらこっちの事は聞いてないらしい。

『…借りは返す』

「え、ちょっと！」

湊はそれだけ言うと、闇に続く道に走り出す。ゆかりはそれを止めようと声をかけるが、その時にはすでに彼の姿は見えなくなっていた。

「はやっ。先輩どうします？」

［…どうやら追っても無駄のようだ。一度エントランスに戻ってくれないか、有里］

「あ、はい了解です…じゃあ行こうか――って順平？」

葵は美鶴の言葉を聞き、皆の方に顔を向けるが、順平は地面に両手両膝をついて落ち込んでいる。どうやら剣の事がショックだったらしい。

「お、俺の剣…野郎、ぜってぇ弁償させてやる」

「いや、あんたの金で買った奴じゃなくて拾ったやつでしょそれ」

「だからだよ！これ結構強かったんだぞ！」

「あははは、大丈夫また落ちてるよ…多分」

そうギャアギャアと騒ぎながら歩く姿はとてもタルタロスの中とは思えない光景だった。

ep 08

目を開けると、湊の目の前には何処かで見たことがある青い個室の景色があった。

「――――ようこそベルベットルームへ」

そして前と同じ様に机をまたいで向かいに立っているエリザベスが立っていた。

「…またか」

最初は驚いたが、二回目となるとそこまで驚かないものだ。しかし、それとは逆にエリザベスは驚いてる…ように感じる。

「僕がここに来たら何かおかしいんですか？」

皮肉を言うような顔で思ったことを率直に言葉にする。するとエリザベスは顔を横に小さく振り、ゆっくりと口を開く。

「いえ、そういわけではなにのですが。このお部屋に来れるのは主の“御客人”だけなのでして…無意識にここに訪れるということは、やはりあなたも“御客人”ということなのでしょう」

「つまり…俺が無意識でこんな悪趣味な部屋に来てるわけ？」

…自分で言ってて悲しくなってきたので顔を片手で覆った

「しかし、困りました。完全に目覚めてないあなたに私はお手伝いができません…だからといってこのままお帰りいただくのも失礼かと…」

失礼とか思うのなら、その“御客人”というのは何なのかを説明しろ。というか、何で自分の事をいろいろ知っている事を最初に詳しく説明してくれとか、いろいろツッコミを入れたいが、聞くわけがないのはわかる。

しかし、このままでは何も進まない。なので、ダメ元で言葉にして見ることにした。

「そう思うならいろいろと質問させてもらっても？」

「――そうですね。こちらも暇を持て余しておりましたので、少しの間だけ雑談」

予想とは違い、ありがたい返事が聞けたが…

「“雑談”ね。用に俺の質問に答える気はないと」

「内容によりますが」
「はっ、どうだか」

エリザベスの言葉に軽くそう言いながらも、質問の内容を考える。どうせ本当に聞きたい事は多分アウトなのだろう。
だからと言って“雑談”レベルの会話なんて面倒なだけだ。こちらの意味のある情報が聞きたい。

「…前に依頼してきたシャドウの討伐。あのシャドウは何だ？何で俺に倒させた？」

どこまで聞いていいレベルか分からない現状、本当は『あんたら何者』と聞きたいところだが、前にエリザベスに聞いたらまともな返事が返ってこなかった。ならば聞いてない事を聞いていった方がいい。

「…あれは貴方が倒さねばならない者、とでも言っておきましょう」

…やはり、答えになってない。なら聞き方を変えてみよう。

「あれはあいつ等に助けてもらったようなものだが…あれは俺が倒した事になるのか？」
「ええ、結果的に貴方が倒したことには変わりありません。報酬はいつも通りに？」
「……」

エリザベスの言葉に湊は顔を曇らせる。その顔を見たエリザベスは何か不満なのかわからず顔を傾げる。

「？何か不満が？」

「いや、そう言うわけじゃなくて…その報酬、ちょっと待ってくれないか？」
「？？よくわかりませんが…そうした方がよろしいのでしたら、従いましょう」
エリザベスがそう頷くと、いきなり湊の視界が歪みだす。
「どうやら、お目覚めの時間ですね。では、またのお越しを」
エリザベスは行儀よく頭を下げる。そこで湊の視界は黒に染まった。

◆

「おい！湊！起きろ！」
「…あ゛？」

頭に軽い衝撃が走り、湊は目を開ける。
目の前には見なれた人間の顔と教室の景色が見えた。

「ったく、もう授業終わってるぜ？さっさと昼飯、行こうぜ」
「…ああ、わかったよ」

湊は順平に軽く叩かれた頭をさすりながら立ち上がる。その顔はまだ少し眠そうな顔だった。

「なんかお前この頃調子悪そうだな。ちゃんと飯食って――」

順平は湊を心配し言葉をかけたが、それは湊の持っているパンを見て途切れる。

その手の中にはいつも通り気持ちが悪くなりそうなほどの量のパンがあった。

「〜…るな」

そう言って、順平は大きなため息をつく。

「？そっちの方が調子悪そうだね」

いつもなら何かしらツッコミがくる所に溜息など伊織順平らしくない。

湊はそうだけ言って、席を立ち教室を出るために歩きだし、順平もそれに続き歩き出す。

「いや、なんていうか…自分に自信を無くしたというか、失望したというか」

「？？話しが見えないんだけど」

湊は順平の言いたい事が理解できず、頭を傾げる。

「いや、詳しくは言えないんだけどよ…その、目の前で何か起こってて、自分がどうにかしなきゃいけないのによ、何にもできない時ってないか？」

「……――――」

順平の言葉に湊は一瞬立ち止まり、何かを思い出すように上を向く。

――――思い出すのは、あの雪の日…結局何もできなかったあの日

の事…

「？どうした？」
「…いや、そういう事もあったなって思いだしただけ」

湊は顔を元の前の方向に戻し、再び歩き始める。

「――それで、結局言いたい事は何？」
「あ、いや、それって悔しいじゃん。その後お前ならどうするのかな～って聞いてみたり」
「…相談する相手を間違えてるって感じないか？」

湊は小さく笑うようにそう言うが、順平はそれに「へ？いや別に」と言った顔でこちらを見ている。

「はぁ…一般論からいうなら、どうにか出来るようになるしかないんじゃないか？」

湊はめんどくさそうにそうだけ言って、屋上に続く階段を上がり始める。

「それって、要は努力しろってことか？」
「当たり前…どう努力するかは自分で考えろ」

順平の言葉をすぐに返し、湊は順平を置いてさっさと階段を上がっていく。

順平は先に行った湊に気づかず、その場で立ち止まり自分の手のひらを見る。

「…結局自分で考えろってことかよ。ま、当たり前なんだけどよ」

そうだけ小さく呟き、湊の後を追って階段を上りだした。

◇

その日、五月八日の影時間。

湊はタルタロスの中から大きな荷物を担いだ状態で出てきた。その格好はいつも通り、黒い雨合羽とマスクといった不審者としか思えない格好であった。

入口のような所で荷物を下ろし中身を整理する、足りないものがないことを確認すると再び荷物を持ち、溜息を吐く。

『はぁ…これで前に使いきった“アイテム”の補充はできたが…これでは効率が悪いな』

湊はそう言いながらタルタロスの前にある門を通ろうと――した瞬間に足を止めて空を見る。

『何だ…この甘い、臭い。しかも、この感じどこかで…』

周りを見渡しても臭いを発するものはない。湊は気のせいかと思い、再び足を進めようとする。が

『！…誰だ』

人の気配に気づき、荷物を地面に落とし、サーベルに手をかける。

「おや？足音は消したいたはずでしたが…気付かれてしまうとは、慣れないことはするものじゃないですね」

湊の声に反応するように、校門の暗闇から出てきたのは上半身が裸で派手な刺青が刻まれている男が一人で現れる。

『お前……』

自分がここまで接近を許したのに冷や汗をかきながら、相手の上半身の刺青を見る。

それは刺青として騙せてはいるが、何処かでみたことがある。

湊は必至に記憶の中を探しはじめ、それは時間をかけずに見つることができた。

『例の“施設”の人間、か。何の用だ？』

「ほう、これだけでわかるということは、関係者と言ったところでしょうか？」

男は湊の反応に興味深く頷き、刺青がある腕を掴む。

『答える義理はない…そう言うあんたは何の用だ？薬なら他を当たれ』

湊はそうだけ言って、荷物を持ちなおし、男の横を通り過ぎる。

「まぁ、待ってください。私はあたなに聞きたい事があるのです。もちろん薬関係ではなく…あなたの出生について」

男の言葉に湊はピタリと動きを止める。男は湊の行動を聞いてくれるものとして受け取り、言葉を続ける。

「私の名前はタカヤ、あなたの想像どおり“施設”の人間…ストレガと名乗っておきましょう。察するにあなたは『やめておけ』」

タカヤと名乗った男の言葉を遮ったのは、湊の言葉と風を切るような鋭い音。

タカヤは首元を見ると、サーベルの刃を首に突き付けられている状態だった。

『それ以上言うと、あんたと俺に何の得はないぞ』

「…どういうことでしょうか？」

『はっ、俺がこのままあんたを殺せば、何処かで隠れている仲間が俺を殺すんだろ？どっちも死んで得なことはない』

湊はそう言いながら、周りに気を配る。誰かがいる気配はわかるが、何処にいるのかわからない。

防御手段があまりない湊が死角からのペルソナ攻撃を受けて無事で済むわけがない。

「…いいでしょう。もともと私はあなたの“生きてる意味”を知りたかっただけでして、もう少しお話をしたかったのですが…まぁ、仕方がないでしょう」

タカヤはそう言って両手を挙げた。それを見た湊は静かにサーベルを鞘に戻す。

「では、良い夜を」

『…ちっ』

湊は舌打ちをして、その場を去っていく。タカヤはその後姿を静かに、見続けていた。

「…おどろきましたわ。気配読むとか、ほんまにできるんですね」

そして何処からか待機していたジンが現れる。

「ええ、あれは私達と違って特殊な訓練でも受けない限り無理な芸当ですね…ですが、あの反応をみるに」

「十中八九、俺達と一緒やな」

タカヤの言葉にジンが続く。しかし、タカヤはジンの言葉を否定するように顔を横に振る。

「それは早計ですね。私達と一緒ならば彼の存在に“矛盾”がでてくる」

そう言っているタカヤの顔は何故か嬉しそうで、ジンは不思議に思い、実際に質問する。

「楽しそうですな」
「そうでしょうか？…そうですね。私は彼の生き方に興味はありますが、彼は――――」

タカヤはそう言って、言葉を止める。

「？どうかしたんですか？」
「いえ、そろそろ帰りましょうか」
「は？はぁ、わかりました」

そう言って帰る間ぶつぶつと独り言をしているタカヤと彼に無言でついていくジンだった。

◇

湊はタカヤと別れて帰る道を歩いていた。そのスピードは早く、何処か心に余裕がない様子だった。

≪私はあなたの“生きてる意味”を知りたがっただけ≫

『っ！…糞！』

タカヤの言葉が頭に響き、立ち止まり棺に拳を叩きつける。

『――――俺が…生きてる意味なんて…』

そう言って、湊は膝を地面に付けた。

蛇足

影時間がとかれた瞬間。とある通行人Aさん

「（＿？Д？）ごはぁ！…ぼ、ボディに衝撃…が」

謎の骨折によって病院送りにされる。

ep 08（後書き）

最後のは書きたかったから書いた。後悔してはない（たぶん）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7280p/

p3p if minato story

2011年10月22日23時09分発行